

HILLS LIFE

それぞれの「新しい日常」のはじまり。
これからの街のあり方を考えてみよう！



102

JULY
2020

Changemakers
in an Emerging World

ヒルズみんなのルール

HILLS Rules for Everyone

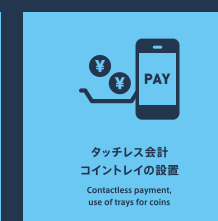
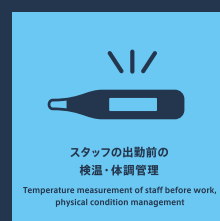
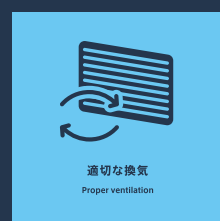
みんなで守るルール

Rules to protect everyone



ヒルズの取り組み

HILLS Safety Efforts



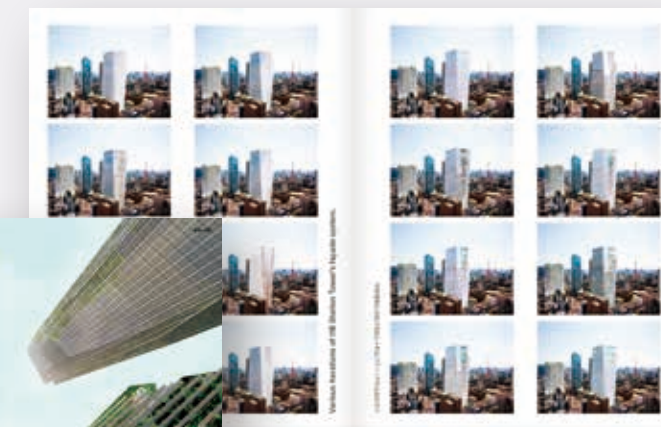
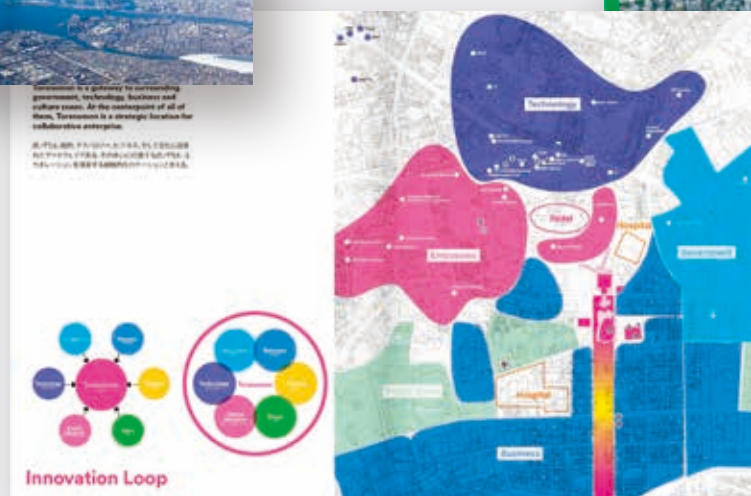
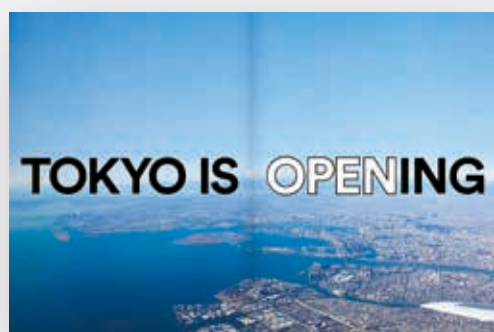
詳しくは、各施設WEBサイトをご確認ください。For details, please check the website of each facility.

Hello, New Normal

「新しい日常」のはじまり

今年の初めから今なお続く新型コロナウイルスの世界的な大流行をきっかけに、「新しい日常」がはじまりました。これまでの常識が揺らぐ中で、私たちの生活はどのように変わっていくのか。私たちの生活の場である都市はこれからどうあるべきなのか。その問いと向き合う前に、あらためて見つめ直しておきたいことがあります。いつの時代にあっても都市は、そこに集まる人たちのライフスタイルの変化とともに変容するものであること。そして、つねに変化するものとして都市を捉えることを通して、私たちは〈ヒルズ〉をつくり、育んできたことを。都市の本質とはそこに集う人たちであり、それぞれの暮らしの中にごさる。その考えを胸に街づくりと向き合い、都市に集う人たちが安心安全に暮らし、健康を確保できることを最大の課題のひとつとしてきました。「新しい日常」がはじまった今、街のスタッフのみならず、来街するすべての人たちと力を合わせて互いを守りあっていくために、「ヒルズみんなのルール」を設けました。これからもヒルズが、生き生きと暮らし、働き、遊び、勉め、学ぶための場であり、一人ひとりが新たなことに挑戦してゆける場であり続けるために——。今号の特集では、その一環としてこれからの都市のあり方を考える一歩とすべく、世界各都市で魅力的な活動に取り組む「チェンジメーカーたち」の声に耳を傾けてみたいと思います。

ヒルズみんなのルール HILLS Rules for Everyone



TORANOMON

Revising the Mesh of Metropolis

重松象平の“つながり”

これからの都市再生モデルとなる、(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー。虎ノ門エリアから東京、ひいては都市そのものを楽しんでいくイノベーションの発信源です。設計した OMA NY の代表、重松象平さんに話を聞きました。

text_ Mika Yoshida & David G. Imber
edit_ Kazumi Yamamoto



OMA NY が制作したステーションタワーのコンセプトブックを覗いてみましょう。街の未来のヒントがここに……?

ステーションタワーを設計するにあたり、OMA NY が制作したコンセプトブック。「東京は開かれた都市になってゆく」という仮説のもと、虎ノ門ヒルズエリアが今後どう変わるかを鮮やかなビジュアルで見せる。有名レストランの数や街の清潔度、都市人口など多くのカテゴリで「世界 No.1」の都市、東京。だが世界の都市ランキングでトップに輝くことは今までなかった……? 外からの視点も含めて捉えた東京の特徴や、乗り越えたい課題も示しつつ、ステーションタワーが薄く、より良い街づくりを提唱する。今後開発される建物のうち100㎡を超えるものに屋上・壁面緑化を義務づけたり、スタートアップ支援に多額の予算を投じた東京都の取り組みなど、知っておきたい事ばかり。



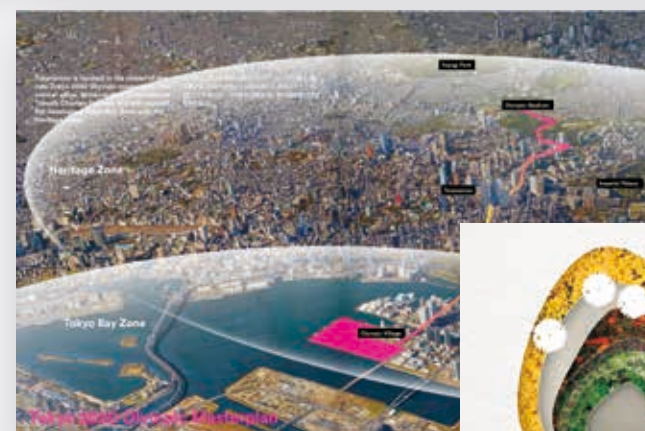
The atrium is an exciting entryway to Station Tower. The soaring space invites the vibrancy of Shintorai THA, and is a thoroughfare access to the three towers.

アトリウムはステーションタワーの興奮的なエントランスである。また、屋上緑化は、新都市の空間的なつながりながらも、他の三塔の都市的なアクセスを...

#1 Urban Population
#1 Largest Economy
#1 Safest City
#1 Number of Patents
#1 Number of Millionaires
#1 Number of Books Published
#1 Best Public Transportation
#1 Population with Tertiary Degree
#1 Largest Creative Workforce
#1 Number of Daily Train Passengers
#1 Cleanest Streets
#1 Culinary Destination
#1 Number of Library Loans
#1 Best Taxi Services

TOKYO leads in many categories but is not #1 in overall city rankings.

Global City Rankings
TOKYO #6
TOKYO #5
TOKYO #4
TOKYO #10
TOKYO #18
TOKYO #4
TOKYO #2





カニエ・ウェストや蔡國強、マリナー・アブラモヴィッチなどアーティストとの協働も多い重松氏。

OMA NY が設計した世界的プロジェクトの数々

マイアミのファエナ・フォーラムやケベック国立美術館、ニューミュージアム別館など美術館の設計を始め、オークションハウス・サザビースの本社屋や、コーネル大学建築学科のミルスタインホール、住宅パーク・グローブ・マイアミも。空間構成を手がけたメトロポリタン美術館のファッション展や、ディオール展の展示会も代表作。



街に「軸線」という概念と空間体験を導入する。

006/007 HILLS LIFE VOL.102 SPECIAL ISSUE

The Next Level of Connection

地元民さえも意識していなかった土地のポテンシャルが、建築によって引き出される。建物が周辺エリアを育み、その場所ですら生まれ得ない街へと豊かに実らせる。OMA NY 率いる重松象平が設計する建築は、都市の未来像だ。
NY やマイアミ、ケベックシティに LA、シカゴ、デンバー、サンフランシスコと、各地で建築を生み出して来た重松氏。(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワーによって、東京という街はどう開かれていくのだろうか？
—— ステーションタワーはどのような役割を果たす建物なのでしょう。
重松 (以下 S) 多彩なアクティビティを誘発し、みんなが集まってエネルギーやアイデアが発生する、という場所づくりを大事にしたいと思っています。溜池や赤坂、汐留、昔ながらの街並みや官庁街など、色々なスケールでの多様なエリアが周囲にある

のが虎ノ門の良さです。これまで明確なアイデンティティはありませんでしたが、多くの公共空間をつくり、青空市場やイベントなどを通して場所同士をアクティビティでつなげることによって新たなアイデンティティが生まれてくるのではと。ステーションタワーはその中心となるビジネス、コミュニティ、緑の各プラットフォームを作ります。—— 他の超高層ビルともつながるのですね。
S 超高層ビルは独立して考えられがちですが、そろそろタワー同士のネットワークを積極的に考え始める時期に来ていると思います。
—— 超高層ビルは孤立したイメージがありますが、ステーションタワーでは低層階からさまざまな場所へと歩いて行くことができ、とても新鮮です。
S 新しい東京と昔の東京の「結節点」にあり、さらに新しい軸線の一端を担っている。

る。つまりジャンクションにあります。東京にはこれまであまり存在しなかった、西洋的な「軸線」という概念と空間体験が強調される時があっても良いのではと感じました。アークヒルズ、仙石山、愛宕山とつながる緑とアクティビティのネットワークは、30分ほどで歩ける距離です。そこで他のエリアに向かう「門」の役割をステーションタワーは担います。環状第2号線(新虎通り) はかつてマッカーサー道路と呼ばれ、愛宕神社はあの桜田門外の変にもゆかりのある場所です。そうした歴史も加味しながら、つないでいくようにしました。
—— 徒歩で移動しながら、この一帯を意識できるようなのですね。
S 意外とそれぞれ近いですし、歩けば色々な街並みも見えてきます。虎ノ門というかつてのオフィス街の印象が強く、あまり「留まる」ためのプログラムは無かったと思います。ステーションタワーにより地上だけではなく、地下でもつながりが改善されます。日比谷線の新駅ができ、両側

には大きなアトリウムが。東京メトロはこれまで広場というものを持ってこなかったのですが、とても公共性の高い、日光の入るステーションプラザができます。ここに人々が到着すると、まずこうした大きなパブリックスペースが地下で迎え入れてくれる。地上でもブリッジが虎ノ門ヒルズからのびて建物の真ん中を貫通し、ショップなどへ。虎ノ門ヒルズエリアの新しいアイデンティティにつながりますね。
—— 最上部のビジネス発信拠点も印象的です。
S オーディトリウムのバックには皇居が見えます。象徴的な空間でもある、文化施設です。上はガーデンになっていて、低層階にある緑の真ん中の軸線がそのまま立体的に続いていくイメージです。
—— 都市における緑の重要性を感じます。
S 東京は世界的に見ても緑の少ない都市ですが、公共スペースのデザインという観点においても遅れていると思います。緑とアクティビティが両立して初めて、た

とえば NY のブライアントパークのように活性化するものです。虎ノ門ヒルズの広場がヨガなどに使われているように、ステーションタワーのブリッジ上でもマーケットやイベントなどが可能になります。都市の公園・緑・アクティビティをつなげていくというわけです。また今はワークスペースのあり方も多様化していますから、働く人達にとっても、ブリッジのベンチに腰かけて仕事をしたりといったタワー内のアクティビティがにじみ出る仕掛けを提供できればと。—— ブリッジや新たなルートにより、これまで徒歩で移動しにくかった場所同士がスムーズにつながると、近隣住民の方々にとっても新たな発見がありますね。
S 相乗効果も生まれてくるでしょう。これまでの街づくりは消費中心の傾向がありましたが、虎ノ門ではプラットフォームを作り、多様なアクティビティを誘発する。それにより由緒ある神社など古いものが新しいものと交わり、独自の文化や新たなエネルギーが生まれてくるのでは、と思います。



2023年完成予定の「ステーションタワー」。インタラクティブなネットワークが東京に誕生する。

PROFILE
重松象平 建築家。福岡県出身。1998年にOMAへ入社。2006年、OMA NYのチーフ・パートナー/ニューヨーク事務所代表として活躍。08年からOMA NYのOMAパートナー/ニューヨーク事務所代表として活躍。

新しいライフスタイルをつくる、街のチェンジメーカーたちの試み

虎ノ門ヒルズ ビジネスタワーがオープンするとともに、6月6日には東京メトロ日比谷線「虎ノ門ヒルズ駅」が開業するなど、東京の都心に新たな街づくりの動きが加速しています。そこで、街をもっとたのしく、もっと身近に、そこに暮らし、働き、憩うひとりひとりのライフスタイルに寄り添うものにするために、ニューヨークで、パリで、東京で、独自の取り組みを続ける人たちの活動に注目。それぞれの魅力的な試みを通して、街はどのように変わっていくでしょう？

※掲載した各施設・サービスの利用に際しては最新の情報をご確認ください。

Changemakers

in an Emerging World

NEW YORK

David Byrne Sings of His Utopia

デイヴィッド・バーンの“ユートピア”

「デイヴィッド・バーンがミュージカル？」と誰もが驚いた、その名も『デイヴィッド・バーンのアメリカン・ユートピア』。ブロードウェイの老舗ハドソン・シアターで今年2月まで、4カ月ものロングランを連日2公演。観た人から、観てない人へ評判はどんどん広まり、驚異の大ヒットに！ 根底に流れるメッセージは「選挙に行かなきゃね！ お互いの違いを受け入れあう世の中にしていこう。住みよい町、住みよい国、住みよい世界ってほくらで作っていきけるものなんだよ」。軽快でパワフルなステージで、理想郷への道のりを指し示す。これぞ「ユートピア案内人」、デイヴィッド・バーンの真骨頂だ。

illustration_Maira Kalman
text_Mika Yoshida & David G. Imber
edit_Kazumi Yamamoto



Question

『アメリカン・ユートピア』で
伝えたかったこととは？

Answer

僕が演じる主人公は
最初、とても内向的で
アタマの中に閉じこもってる。

それがエンディングでは、
目が外へ向き他者や社会と
大きく関わる人間へと変わっていく。

In the show we see a character who begins by being very inward inside his head and by the end the character is more socially engaged.

観に来てくれるオーディエンスは
この「変容」を
自分のことのように
受けとめてくれる。やはり、
今がこういう時代だからね。

The audience seems to identify with this transformation, especially in the times we live in.

観客をカブけるのは、
セリフや歌詞といった
「ことば」じゃない。

Often the encouragement is not in the words.

ステージ上のバンドを観て感じる、
その体験だ。喜びにあふれ、
互いにしっかりと機能しあう
コミュニティがそこにある。

but in what the audience sees and feels and experiences watching and witnessing the band.

知識じゃなく、実際に目撃し、
体感すること。
それがなにより大切なんだ

they see a joyous and engaged community- they don't just hear about it, they witness it and experience it.

David Byrne

New York City

ステージの大きな縦線には心弾ませる絵がびっしりと描き下ろしたのはイラストレーターのマイラ・カルマン。バーンとはTヘッズ時代からの盟友だ。

PROFILE
デイヴィッド・バーン 音楽家/美術家。1991年のトーキング・ヘッズ活動休止以降、ニューヨークを9枚発表。レーベル運営やアート制作、メディア発足と多岐にわたる活動ぶり。

008/009 HILLS LIFE VOL.102 SPECIAL ISSUE



LAを代表するクリエイターのクリスティーナが、ここNYにもスタジオを構えた。最初に催したのが『砂漠の植生』展だ。西海岸の伸びやかな空気がマンハッタンに舞い下りる。

NEW YORK

An Art of Scarcity, Steeped in Humanity

クリスティーナ・キムの“手”

LAを拠点に活動するクリスティーナ・キム。エシカル、サステイナブルという言葉がキーワードとなるよりもはるか前から、誠実なものづくりを実践してきたデザイナー／アーティストです。美しいアイテムの一つ一つにあふれているのは、人々や世界への賛辞でした。

photo_Dean Kaufman
text_Mika Yoshida & David G. Imber
edit_Kazumi Yamamoto

フライングフィッシュ・プロジェクト
『砂漠の植生』展

アートシリーズ『フライングフィッシュ・プロジェクト』。展覧会のテーマは、多肉植物に魅せられたある夫妻がバームスプリングで独自に開いたモーテン植物園。同園の植物スケッチから起こした刺繍ワークやアプリーケを発表した。素材は、本来なら廃棄される余り布。インド・コルカタの伝統職人チームとクリスティーナの手によって、時間かけて生み出されたアートピースだ。





ジャパン・ソサエティの展覧会用に、各地の協働者たちと一針一針、古布をはぎ合わせる「蚊帳」プロジェクトの真っ最中。

を燃ったピースでできているのがわかる。「ナショナル・ジオグラフィック」誌から、青や緑色のページだけを切り取って作ったものなんですよ」とニコリ種明かし。

インド、メキシコ、コロンビアなど多くの国を旅して地元の人々と協働する。「学ばせてもらう、という姿勢で臨みます。現地の素材や製法でエスニック調の商品を「作らせる」のが、アメリカの一般的なアプローチだ。一方、彼女はまずコルカタならコルカタで栽培や織り方などコットン文化を学ぶ。その上で湧いた発想を、現地の人たちと相談しながら形にする。女性たちに作業をしてもらうことで、彼女達の就労にもつながり、消えゆく伝統手仕事の継承という

夢も同時に託す。クリスティーナはこうも言う。「何かを1つ作る際、作り手にも同じものを1つ差し上げるようにしています。今は相手に伝わらないかもしれないけれど、何年もしくは何十年かのちに、本人か誰かがその価値や私の意図に気づいてくれるかも知れません、とも。

韓国での少女時代、同居の叔父たちが地質学者や東大留学生だったため、外国からのゲストが常に家を訪れていたという。遠い異国の見知らぬ文化に、触れる機会に恵まれながら成長する。中でも彼女を魅了してやまなかったのが、インドの人々の装いや色づかい、香りやデザインだ。憧憬は、敬意。クリスティーナのポジティブで謙虚なまなざしの原点が、ここにある。

クリスティーナ・キムがつくる服は、しばしばウェアラブル・アートと称される。「身にまとうアート作品」と敬意を込めて呼ばれる理由の筆頭が、その美しさ。服というより「衣」と表現したくなる繊細なテキスタイルと優美なデザインは、長い月日をかけたりサーチ、そして実直な手仕事のためものだ。世界の国々で古くから継承されてきた伝統手法と精神が、クリスティーナの高い美意識を通し、現代人のためのタイムレスな一枚へと形づくられる。

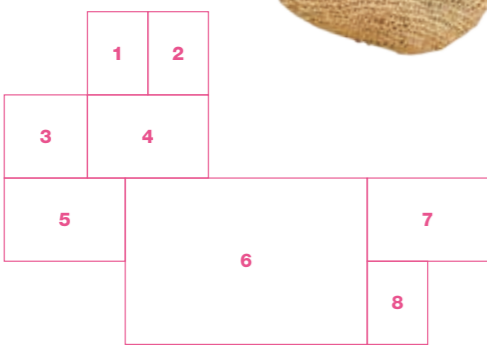
一着一着がオリジナル・ピースというのも、美術品になぞえられる所以の一つ。彼女とチームの手でまかなえる範囲での、少量生産だ。アーティザナル、エシカル、サステイナブル。ファッションやデザインの世界で、近年注目されている新たな意識のあり方を、クリスティーナは1990年代初頭からすでに実践してきた。「きっかけはオーガニック・コットンとの出会いです。米国におけるオーガニック・コットンのパイオニア、サリー・フォックスに影響を受けた私はインドを訪れ、コットンの伝統的な栽培やつむぎ方などを教わりました。そしてミニマムウェイスト、つまり何も無駄にしない智慧がオーガニック・コットンの本質、と心得たのです」とクリスティーナ。開発途上国の低賃金労働を搾取しながらの大量生産、布地を山ほど無駄にして大量のゴミを出す、アメリカの大量消費主義とは正反対の文化に出会い、開眼した。

だからクリスティーナは、ゼロ・ウェイストを貫く。裁断で余った部分はハート型の小さなクッションに。ジャムダニ織のハギレも同じサイズに丸くカットし、たくさんつけて大きなオブジェとする。「裁断の専門家ではないからこそできる発想でしょうね」。遠くからは淡い空色に見えるカーテンも、そばに寄ると一つ一つ、紙



安藤忠雄が設計したピュリッツァー美術館のために制作したクッション。見た目は石のようだが、触るとふんわり柔らかい。

コロンビアの先住民族に古来から伝わるバッグ (Tutu)。彼女たちの生活様式に負担や影響を与えないよう慎重に協働する。



大切なのはゼロ・ウェイスト、何も無駄にしない智慧。

India, Colombia, Korea, Kenya, Japan :
A Designer's Outreach Across the Globe

①クリスティーナのブランド (dosa) のハギレでメキシコ・オアハカの女性達が作った、ハート型チャームのリサイクル・プロジェクト。約270キロのハギレから111,000個を制作
②『ナショナル・ジオグラフィック』のページを燃ったピースでカーテン状オブジェを
③インド・ジャムダニ織のハギレを無駄なく使ったアイテム。心弾ませる色彩もクリスティーナの得意技
④クーバー・ヒューイト博物館「スクラップ展」にて。ウズベキスタンのペルベットで作ったクッション。ペニノキの種子から採った色素「アナトー」で鮮やかなピンクに
⑤LAの〈ワッツ・タワー〉にインスピレーションを得た衣服10点を制作。依頼は美術館 LACMA
⑥さらに発展させたのが2016年ヴェネツィア・ビエンナーレ、建築家ピーター・ズントーとのコラボ。ズントーが会場に再現したLACMAの中で、色彩のグラデーションによるインスタレーションを
⑦インド・ラバリ族のジャケット
⑧日本の紅花を用いた作品。



エッフェル塔と対峙するように停泊する船。パリ近郊のセーヌ川にいまも残る造船所で建造された排水量300トンの船内に、真正正銘のレストランがある。



デュカス・シュール・セーヌ

セーヌ川に浮かぶ初の電動船レストラン。エッフェル塔を仰ぎ見るシチュエーションで食前酒を楽しむうちに音もなく滑るように船は出発。グラン・バレ、ルーブル、オルセー、ノートルダムなどを右に左に眺め、ボンヌフ、芸術橋、アレクサンドル3世橋といった名橋をくぐる2時間。昼(3~4品)、夜(4~6品)のコースメニューが上質なサービスとともに供される。
www.ducasse-seine.com

伝統品種「キュロワゾー」鶏のロースト。付け合わせのじゃがいもはノワールムティ産と、食材への真摯なこだわりが一皿の料理に込められている。



明るいシルバーのイメージで統一された船内。椅子の座面と絨毯のデザインはパリの街区。中央を走る青い筋はセーヌで、赤い丸は船の停泊地を表している。



「光のマジックが夢幻の世界を見せてくれる夜もいいし、パリのモニュメントがよく見える昼のクルージングも大好きです」

PARIS

The Way of Gastronomy for Environment

アラン・デュカスの“未来形ガストノミー”

食の潮流は時代を映す鏡。世界が注目する当代フランスの騎手の新店は、花の都パリのセーヌに浮かぶ船という意表をつく形で登場した。そしてそこには、本当の贅沢とは何か、この先の時代への道しるべが託されている。

photo(portrait) & text_ Harue Suzuki edit_ Mari Matsubara
photo courtesy of Alain Ducasse

エッフェル塔を真正面に捉える岸辺にガラス張りの洒落た船が泊まっている。船の名は「デュカス・シュール・セーヌ」。料理界の巨匠、アラン・デュカス氏の夢が形になったものだ。

「私が初めてパリに来たとき、17か18歳でしたが、セーヌの岸辺を歩いていて、これこそが世界一美しいアヴニュー（大通り）だと感動しました。セーヌ川沿いにはパリを代表するモニュメントが並んでいて、岸辺を歩けば壮大な歴史探索をしているよう。そんな最初の感動から40年経ってこの船が実現しました」

彼の船「デュカス・シュール・セーヌ」は、「世界一美しいアヴニュー」をクルージングしながら美食を堪能できるレストラン船で、2018年9月から就航を開始した。

そもそもセーヌに浮かぶレストラン船を作るといふプロジェクトは遡ること5年前、つまり2013年から進めてきたそうだが、途中から、ぜひとも電動の船という意思を固めた。「電気でも動く船はセーヌ初です。幅10メートル、長さ40メートルの船体を動かすだけでなく、厨房や空調機能もまかなえるバッテリーを

搭載するのですから、技術的にも大変な挑戦でした。けれどもその結果、音もなく、公害を出さず、揺れも匂いもない。まるで紙の上を滑るように進む快適さが実現しました」

あらゆる角度からパリのモニュメントを愛でることができる光溢れる船という彼の構想通り、「デュカス・シュール・セーヌ」は最大限に自然光を取り込める設計になっている。側面だけでなく天井もガラス張り、銀色に輝く水面と呼応するように、船内もシルバーグレーを基調にしたデザインで透明感がある。

ところで、レストラン船と聞くと、どこか別の場所で準備してきた料理を温めて供するようなイメージを持たれるかもしれないが、「デュカス・シュール・セーヌ」はさきにあらず。客席フロアの下層が厨房、それも、パラス級ホテルの厨房をそっくりそのまま持ってきたような最新鋭の設備が搭載され、デュカス氏の息のかかった30人ほどの料理人が仕込みから火入れまで一貫して船内で行う。そうして出来上がった料理は、これもまた星付きレベルの給仕人たちによってゲストの元へ運ばれる。

パラス級ホテルの快適さ、星付きレベルの味を船で、それも電動の船で実現したところにデュカス氏が考えるこれからのガストロノミーの示唆がある。将来の美食はどうなってゆくのかと問えば、「地球資源に配慮したものになるだろう」と、まず彼は言う。具体的には野菜や穀物をより多く、動物性タンパク質は少なめ。「量より質を」と、彼は続ける。

「魚なら漁期を、肉や家禽なら、どこでどんな方法で飼育されたものなのかの透明性が確保されていて、食べる人がそれを理解している必要がある。よく考え、よく食べることが個人の健康のためにも地球にも良いとわたしはしばしば言っています。地球上のすべての人が飢餓から解放されるためには、食べ方を変えなくてはならない。すべての人が良質なものを適量食べられるという未来の実現には、人類と地球への配慮が不可欠です。それにはいまスタートを切らなければならない」

「デュカス・シュール・セーヌ」は単に快適で美味しいだけではない。料理界を牽引する巨匠の、未来を見据えたビジョンの反映なのだ。

高層ビル4棟が立体構造の熱帯雨林のような中庭を囲むシンガポールの〈マリナ・ワン〉では、元の敷地より広い面積を緑化している。いずれも最新技術を駆使した省エネ型のエコ設計だが、ドイツ、フライブルクの市庁舎では公共建築としては世界で初めて、太陽光発電での電力生産量が施設の電力消費を上まわった。「一番美しく合理的にできているものは自然の造形ですが、人による造形も機能的かつ美しいものになり得ます。コロナウイルスのパンデミックで、働き方、暮らし方、コミュニティのあり方などの再考が進んでいます。これを機に私たちは地球のエコシステムの一部であることに気付き、環境への配慮が高まることを願っています」

のはデュッセルドルフ。その市街地に9月にオープンする「ケー・ボーゲン2」では、まさに最大限の緑化が行われている(メイン写真)。高架の幹線道路が地下化されたことで可能になった地域再生プロジェクトだ。ここでは5階建てのビルの外装などに、3万本に及ぶ木が生垣状に植栽されている。木は秋には紅葉しその葉が春の新緑まで落葉せずに残るシデだ。全長にして約8キロ、落葉の清掃などに相当手間が掛かりそうだが、季節の変化や生命の循環をリアルに感じることも、人や社会の健全な営みには必要ということだろう。その向かいにあるパビリオンの屋根は地上まで傾斜し、自由に散策できる緑の丘のようなパブリックスペースになっている。

保しようというものだ。今回の虎ノ門ヒルズのプロジェクトは、そんな両者の長年の取り組みが共鳴し合い、実現したものと言えるだろう。「何かを建てるということは、もともとそこに暮らしていた人、あるいは動植物から土地をいただくことでもあります。だからなるべく多くを緑化し、パブリックスペースとして還元したいと考えてきました。木々や草花を植えれば人が集まる憩いの場となるだけでなく、昆虫や鳥なども集まり、自然のエコシステムが営まれます。緑が少ない東京の都心では特に緑化は重要です。今回はビルの外装を8階まで緑化するなどで、全敷地の約50%以上の緑化が実現しました」そう語るインゲンホーフのスタジオがある

あたかも緑の裾野が広がるように、植栽された低層部のテラスが地上のオープンスペースとの連続性を見せる(虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー)。この外装部のデザインを手掛けたのがドイツの建築家、クリストフ・インゲンホーフ率いる「インゲンホーフ・アーキテクト」だ。1990年代から「スーパーグリーン」を提唱し、省エネ型建築にとどまらず、エコシステムを健全に持続できる都市環境作りに取り組んできたこの分野の先駆的存在である。一方、森ビルも1980年代から「ヴァーティカル ガーデンシティ」をコンセプトとし、都心の再開発を進めてきた。建築密度を横に広げず、超高層化によって縦に広げることで、より多くのグリーンスペースを確

ケー・ボーゲン2

9月オープンを予定しているデュッセルドルフ市街地北部のグスタフ・グリュンドゲンス広場。高架幹線道の地下化で解放された一帯にある。劇場や近くの公園との連続性を持たせるよう最大限に緑化。オフィスと商業施設が入居するビルの外装を3万本のシデの生垣でびっしりと覆った。向かいのパビリオンの三角の傾斜した屋根も緑化されパブリックスペースとして市民に開放される。

木々や草花を植えるのは憩いのためだけではない。



DUSSELDORF

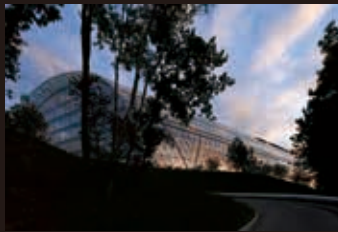
Super Green Architecture

クリストフ・インゲンホーフの“エコシステムをはぐくむ建築”

虎ノ門ヒルズビジネスタワーの外装デザインを担当したドイツ建築家、クリストフ・インゲンホーフ。彼が提唱する「スーパーグリーン」とは？ 3月27日、デュッセルドルフでロックダウン中の彼に電話で話を聞いた。

text_ Megumi Yamashita
photo_ © ingenhoven architects / HGEsch

人工丘陵のように見えるが、実は3万本のシデに覆われたオフィスビル。秋には黄色から赤茶へと紅葉し、文字通り衣替え。エコシステムの循環が実感できる。



欧州投資銀行 (2008年/ルクセンブルグ)

丘陵との連続性を持たせながら高台に建つガラスで覆われた銀行の本社ビル。植栽された複数のアトリウムと接して、自然光が多方向から差し込むフレキシブルで開放的なオフィス環境を実現。サステナブルな建材を使用し、地熱利用や自然換気による室温管理、雨水の利用など、各面において人と環境への配慮を追究。ヨーロッパで初の BREEAM 最優秀賞を受賞している。

PROJECTS BY INGENHOVEN ARCHITECTS

たゆまぬ進化を続ける
スーパーグリーン建築



マリナ・ワン (2017年/シンガポール)

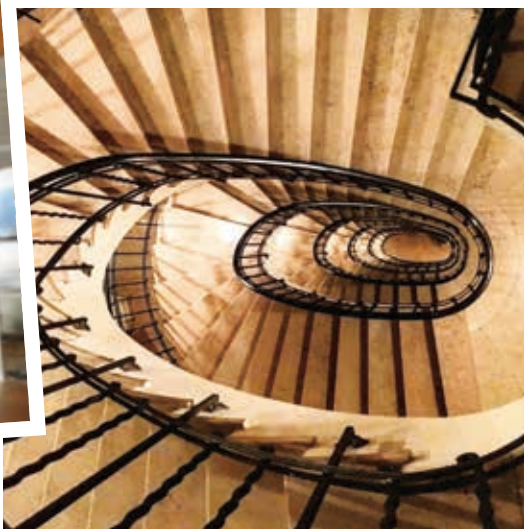
「ガーデンシティ」から「シティ・イン・ア・ガーデン」(緑の中にある都市)へと緑化政策が強化されたシンガポール。新金融街マリナ・ベイの中心にあるこちらは、オフィスとレジデンス計4本の高層ビルからなり、ビルに囲まれた中央部を棚田のような立体的グリーンスペースに整備。一般の人でも利用できる。自然換気、太陽光熱発電、雨水利用など、機能的にも最大限に持続可能な建築。



ルフトハンザ本社 (2006年/ドイツ)

フランクフルト空港に隣接する航空会社本社ビル。騒音や排気ガスを遮断しながら、開放感があるオフィススペースは、8つのアトリウムを設けることで実現。5大陸をテーマにして植栽された各アトリウムのインドアガーデンは人の交流の場であり、また排出される二酸化炭素を酸素に変換する「肺」のような機能も果たす。ガラスを多用しつつ窓や床に木材を使用し、温かみのある内観に。

豊かさとは何かを見つめる、外からの視点の必要。



「日本ではいつも期待をはるかに上回る成果が得られます。高い技術レベルはもちろん、人々が心を込めて真摯に仕事する社会だからですね」とニコリ。

MASTERPIECES OF TONY CHI

ヒルズで体験するトニー・デザイン



アンダーズ 東京 (虎ノ門ヒルズ / 2014年)

51階のロビー周りやレストラン〈ザ タヴァン グリル&ラウンジ〉、客室などのデザインを担当。「記憶」をコンセプトに、和紙など日本ならではの素材や木など時間の経過と共に熟す素材を積極的に採用している。



ステーキハウス オーク ドア (グラント ハイアット 東京 / 2003年)

2018年に「ノスタルジー」をテーマにリニューアル。自らデザインしたホワイトオーク材によるペンダントライトを4つ店内に設置。スタイリッシュなデザインながら、柔らかな光と木材が温かみある居心地の良い空間を演出する。

TORANOMON

The Sophistication of Consideration

トニー・チーの“視点”

インテリアデザイナーのトニー・チーは、2021年にオープンする虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワーで初めて住宅のインテリアを一棟担当します。東京に一体どんな楽しい仕掛けを提供してくれるのか、彼のインスタに、そのヒントがありました。

photo (Instagram) Tony Chi
text_Mika Yoshida & David G. Imber
edit_Kazumi Yamamoto



1989年に仕事で初めて日本を訪れて以来、数え切れないほど日本に通い続けてきたトニー・チー。アラン・デュカスを始めとするスターシェフのレストランやラグジュアリー・ホテルのインテリアを世界中で手がけてきた彼は、国内では「アンダーズ 東京」や「オーク ドア」(グラントハイアット 東京)などを設計している。虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワーを手がけるにあたっては、グラマラス・リビング、つまり「豊かなライフスタイル」を日本の文脈の中で目指したと語ってくれた。

「豊かさという言葉は誤解を招きがちですが、何も高価な宝石を指すわけではありません。人間のもっとも豊かな特性とは、きめ細やかな気配りです。そして日本人ほど、この“気配り”に長けている人々はいません」とチー氏。気配りとは、言いかえれば人と人とを円滑に結び日本独自の「心の距離調整」だ。また、建物に足を踏み入れた時に感じる「自分の場所らしさ」も、何よりの豊かさと言え。今回のデザインに際し、西洋的なこれみよがしの華美さではなく、他者

や世界とのつながりにおいて調和する美意識を何よりも念頭に置いたという。幼少時からマンハッタン育ちのチー氏。だだっ広いアメリカの住宅とは対照的な、一定の広さの中に充足感を見出す日本の美徳を、特に追求した。そんな中でもキッチンをあえて目に入るようにしたそうだ。そうすることで訪問客に自分の「素顔」を示すことができるという。ちょうど本棚を見ればその人の頭の中身が伝わってくるのと同じですね、と笑う。「自宅に大勢の人を頻りに招くという習慣は日本には根付きづらいかも知れませんが、でも……」と続ける。「アメリカで友人宅に遊びに行った時のことです。その家には本格的なバーカウンターがあり、友人のお父さんが後ろでマティーニを作っては皆に振る舞ってくれました。自宅にバーとは何て素敵なんだ！と感激しましたね。この思い出が、レジデンシャルタワーの一階にバーを作るという発想に結びつく。キャパシティはおおよそ30人ほど。「レジデンシャルタワーには3つの側面があります。プライベート、これは

デザインのヒントは日常にあり？

旅の思い出、進行中のプロジェクト、そして創作のインスピレーション。発想の過程が伝わるチー氏の華麗なインスタグラム。本人のアカウント@tonychi_official、スタジオは@tonychi__studio。

自宅部分。そしてセミプライベート。タワー内には住人専用のクラブハウスがあり、ライブラリーやリビングも備えていて他の人達と交流してもよし、一人でいてもよし。そして最後はパブリックで、これが一階のバーダイニングですね。自宅に気軽に招く感覚で、仕事帰りに仲間と一杯傾けながら談笑できる。家の延長としての公共空間だ。「住宅の一階でバーダイニングが実現できるのも日本ならではのNYだ、住民から騒音や風紀の乱れを懸念する声もただちに上がります。ですが、日本には行儀良くスマートにお酒とつきあえる文化素地がありますね。これも他者への気配りに根ざすものなのです。このタワーは内側から外へと向かうデザイン、と語る。たしかに外界から家の奥へといわば逃れていくような一般的な西洋の集合住宅とは、まるで異なる発想だ。これもすべて、インスタグラムにも伺えるチー氏のセンスがあつてこそ。「外からの視点」が見きわめた日本の特性をデザインに活かし、街へと開かれたタワーが誕生していくのである。

Poliform

www.actus-interior.com/poliform



ACTUS EURO STUDIO | Poliformの日本旗艦店は、アクタス新宿店、心斎橋店にございます。
取扱店舗：アクタス新宿店、青山店、京都店、心斎橋店、六甲店、福岡店ほか、日本全国のライセンス・パートナーショップ。お問い合わせ先 03-5269-3207(広報室)

ACTUS



PROJECT GUIDE

TORANOMON HILLS

COMMUNICATION

世界中の観客と対話できるステージ



(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー
ビジネス発信拠点
2023年7月竣工予定

RESIDENCE

都心の真ん中での豊かな暮らし



虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワー
2021年竣工予定

TRANSPORTATION

交通の結節点となり世界中から多様な人が集まる



(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー
駅前広場
2023年7月竣工予定



BUSINESS

オフィスの垣根を取り払って生まれるイノベーション

虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー
イノベーションセンター「ARCH」

GREEN

緑の中で木漏れ日やこごちよい風を感じる



(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー
歩行者用デッキ
2023年7月竣工予定



虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー
虎ノ門横丁

CULTURE

食やアートなどあたらしいカルチャーが生まれる場

働く、住む、学ぶ、遊ぶ、出会う、憩う。
そのすべてがここ「虎ノ門ヒルズ」にある。

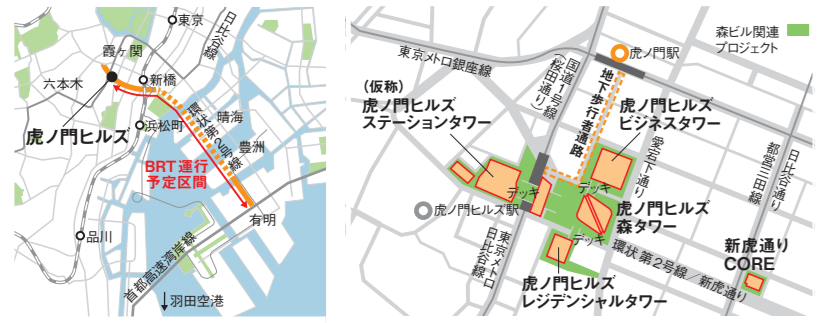
虎ノ門の街が今、大きく変わろうとしています。2014年に開業した「虎ノ門ヒルズ 森タワー」を皮切りに、今年6月には「虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー」が開業。さらに2021年に「虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワー」が、2023年には「(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー」が完成する予定です。森タワー竣工からわずか9年という異例のスピードで、4棟の超高層タワーを中心とした画期的なひとつの「街」が生まれ、「グローバルビジネス

センター」というコンセプトがいよいよ実現します。森ビルが目指す「グローバルビジネスセンター」とは、世界を飛び回るグローバルプレーヤーたちが住み、働き、訪れたい魅力を持った都市であり、生活のすべての側面において豊かな環境を実現できる都市のこと。ここ虎ノ門の約7.5ヘクタールもの広大な敷地には、延床面積約30万㎡(東京ドーム約6.5個分)のオフィスと約720戸のレジデンス、さらに商業施設やホテル

が備わり、これは「六本木ヒルズ」に匹敵する壮大な規模になります。環状第2号線など道路整備と一体化して計画が進められたため、羽田空港や臨海地区と一直線につながり、東京メトロ銀座線・虎ノ門駅、さらに日比谷線に新しく開業した虎ノ門ヒルズ駅とも地下で直結するなど、交通アクセスも抜群。また周辺でも複数の再開発が進む中、今後ますますグローバル企業がこの虎ノ門エリアに集まり、互いに交流することでイノ

ベーションが生まれ、外国資本からも注目される街づくりが推進されます。さらには、ここで働き、暮らす人が快適で豊かな生き方を実現できるよう、緑豊かな環境や文化・情報発信面での充実も図られます。ビジネス面だけでなく、ライフスタイルにとっても真に魅力ある都市づくりを都心部で実現することに大きな意義があります。働き、暮らし、遊び、学び、集い、憩う。そのすべてがこの「虎ノ門ヒルズ」に集約されます。

虎ノ門は霞が関の官庁街に隣接し、また、銀座や丸の内、六本木にもほど近い、まさに東京の中心に位置している。その思われた立地に加え、「虎ノ門ヒルズ」と地下通路で直結する「虎ノ門ヒルズ駅」（東京メトロ日比谷線）や、「ビジネスタワー」に設置されたバスターミナルにより、都内各方面や臨海部へのアクセスはますます良好に。バスターミナルには、都心と臨海地域を結ぶ東京BRTも発着予定。さらに「森タワー」の地下を貫通する環状線2号線が全線開通すれば羽田空港へのアクセスも各役でスムーズになる。



ビジネスタワー
商業施設全体の環境デザインおよび「ARCH」のインテリアデザイン
片山正通

インテリアデザイナー・ワンダーワール代表取締役兼美術大学空間演出デザイン学科教授

「商業施設・ARCH」ともに、グローバルに活躍する人々の御用達となりかつ日本のアイデンティティを持った場所として、御用達 (Royal Warrant) からの造語「Toranomon Warrant Club」をコンセプトにデザインしています”

TRANSPORT
空港・臨海部と一直線、抜群のアクセスの良さ

都心の真ん中に位置する「虎ノ門ヒルズ」は、何といってもその立地の良さが際立っています。グローバルビジネスセンターとしての機能をふさぎい充実した交通網が整備されつつあります。まず2020年6月6日には東京メトロ・日比谷線が約56年ぶりの新駅となる「虎ノ門ヒルズ駅」が開業しました。既存の銀座線「虎ノ門駅」とも地下通路でつながり、「ビジネスタワー」、さらに23年には「ステーションタワー」とダイレクトにつながる、ストレスフリーでスムーズなアクセスが約束されます。さらに羽田空港と往復する空港線BRT（バス高速輸送システム）が発着できるバスターミナルも1階に設置されています。環状線2号線が全面開通すれば、羽田空港までの所要時間はわずか25分（予定）。「虎ノ門ヒルズ」を拠点に世界中を飛び回るグローバルプレーヤーにとって、また海外からやってくるビジネスマンにとって、これまで以上

BUSINESS
大企業から起業家で、ビジネス交流と発信の場

「虎ノ門ヒルズ」は、国境や領域を軽々と超えて、新たなビジネスチャンスを生み出し、豊かな生き方や自由なアイデアで未来を切り拓いていく人や企業にとって魅力ある街であり続けます。たとえば「ビジネスタワー」の4階には、インキュベーションセンター「ARCH」がオープン。東京海上HDやセブン&アイHDなど、大企業の新規事業部門が会員として入居し、様々なスクールやイベントの機会を通じて異業種同士が交流することで、大企業の出島を起点とした新たなイノベーションが促されるという、日

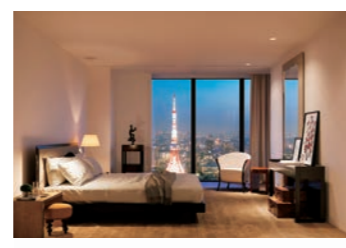
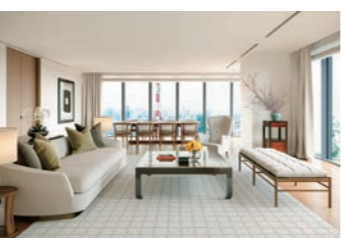
LIVING
上質な日常と豊かな人生をサポートする環境

「虎ノ門ヒルズ」が目指す「グローバルビジネスセンター」は、単なる金融街ではありません。創造的に生きることを求めるグローバルプレーヤーが活躍する街であり、そのためには豊かな居住空間も必要です。2021年竣工予定の「レジデンシャルタワー」は地上54階建て、220mの超高層タワーは住宅棟としては日本一の高さを誇り、約550戸を供給します。大型タイプの住居が多数用意され、都心とは思えないほどの広々としたスケール感です。また、中・長期滞在者のためのホテルライクなサービスアパートメント約160戸も完備することで、より幅広い住まいのニーズに対応します。インテリアデザインは「ブランドハイアット 東京」などでおなじみの世界的デザイナー、トニー・チーが手がけ、モダンで都会的な豊かさに満ちています。また24時間対応のフロントデスクなど、セキュリティや利便性についても充実したサービスが用意されています。会員専用の「ヒルズスパ」には25mプール、ジム、エステを完備。また様々な用途に使えるパーティラウンジや朝食から夕食まで楽しめる居住者専用のダイニングも設けられます。低層部約1,000㎡のフロアにはレストランや店舗が入り、またデッキを通じて「森タワー」と「ビジネスタワー」、そして将来的には「ステーションタワー」内の商業空間ともつながり、毎日の買い物や外食にも大変便利です。「六本木ヒルズ」

「ビジネスタワー」4階には高ビルとベンチャー投資、事業創出支援を行う「WIL」が共同で企画運営するインキュベーションセンター「ARCH」がオープン。片山正通設計の空間はワークスペースやスクールーム以外にカフェラウンジなども備え、サロンのような雰囲気だ。大企業の新規事業部門が会員で、相互交流により新たなビジネスが創出される。

ポスト建物のイノベーション特化型シェアオフィス事業を展開する「CIC」(Cambridge Innovation Center) も、「ビジネスタワー」15・16階に入居予定だ。北米、欧州、東南アジアなど世界7都市に拠点をもち、各国日本に拠上層とある。ターゲットの層はスタートアップ企業で、イノベーション領域に特化したサポートを行っている。

「CIC」が世界で展開するイノベーション促進プログラム「ベンチャーフェス」。その主イベント「Thursday Gathering」は毎週木曜日に開催され、イノベーションを牽引する起業家やアイデアマンたちが集い、交流している。東京では「虎ノ門ヒルズ」を会場に2019年にスタート。セミナーや有識者によるメンタリングなど多岐なコンテンツが魅力だ。



成熟した東京の都市文化に向き合い、グローバルに開かれた都市ならではのモダン暮らしとサステイナビリティを追求した「レジデンシャルタワー」(2021年竣工予定)。43〜54階には「スカイスイート」と呼ばれる59戸が設けられ、眼下に東京の街を見下ろす眺望の素晴らしい。他の通称を許さない。

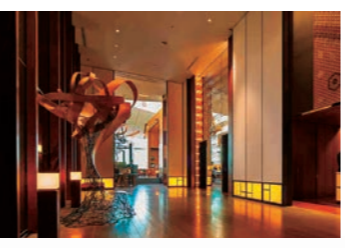
「スカイスイート」内のマスターベッドルーム。インテリアデザインは「アンダーズ 東京」を手がけたトニー・チーが担当。無駄な装飾を省き、美観された美しさを引き出すシンプルかつモダンな雰囲気に仕上がっている。自然を豊かに、共有する日本の住まいの歴史とも配慮し、光の取り入れ方や空間のつながりなど細節にも工夫がなされている。

ビジネスの中心である都心のタワービルに開かれた都市ならではの居住空間は「レジデンシャルタワー」で実現している。24時間対応のフロントデスク(スカイスイート専用)はバイリンガル対応のスタッフが配属。ドアマン、ワラームとボーサーサービスなど、高級ホテル並みの細かいサービスとセキュリティを享受できる。

レジデンシャルタワー
インテリアデザイン
トニー・チー

インテリアデザイナー
tonychi 創立者兼代表取締役

“レジデンシャルタワーでは世界や他者とのつながりにおいて調和する美意識を何よりも念頭に置きました”



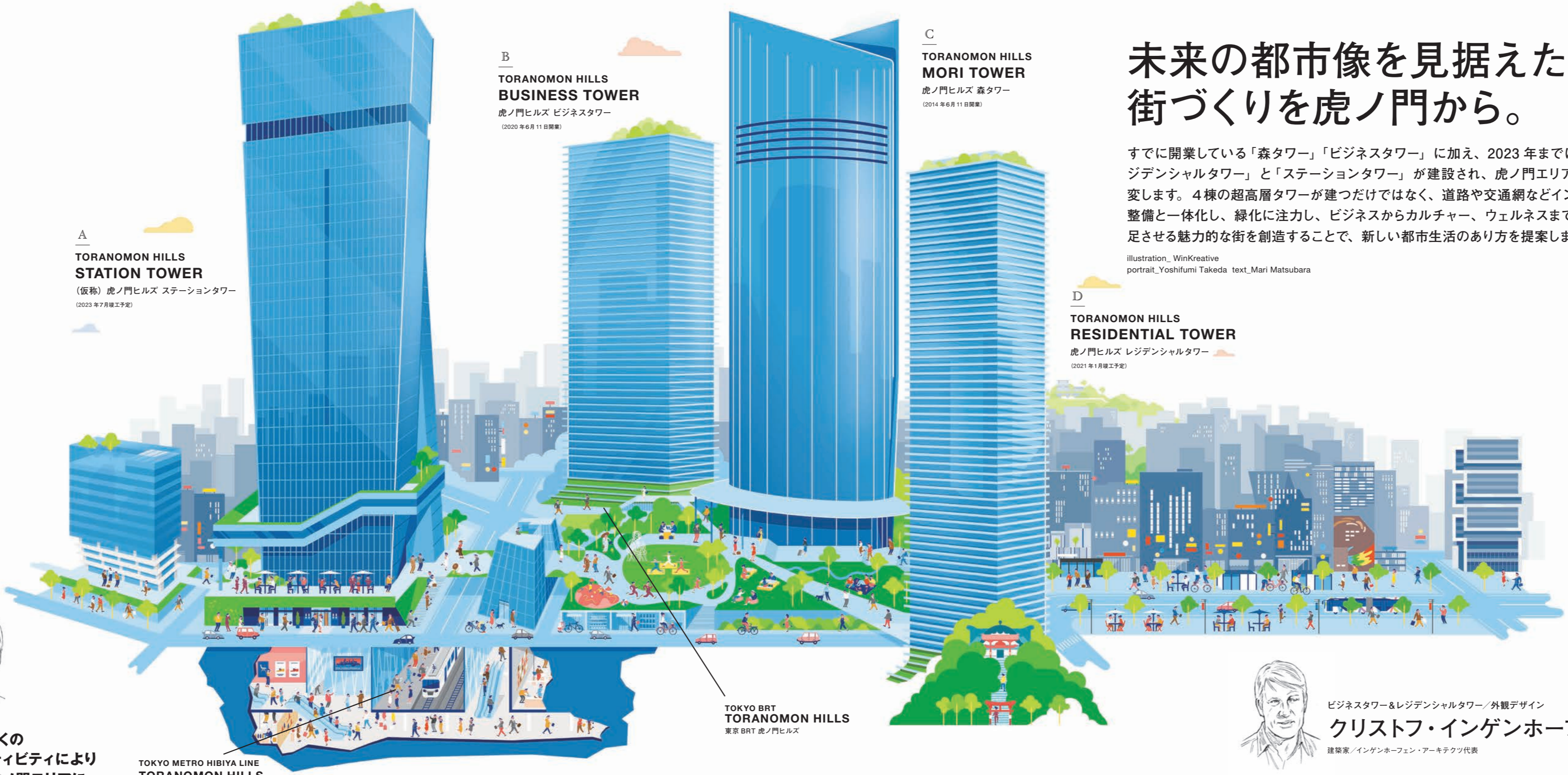
「森タワー」高層階に位置するラグジュアリー ライフスタイルホテル「アンダーズ 東京」のレセプション。ヒンジド扉でパーソナルスタイルを意味するアンダーズでは、スタイリッシュで温かみのある空間の中、個々のゲストに合わせておもてなしで心地よい滞在が楽しめる。ゲスト一人ひとりが自宅にいるかのように過ごすことができる。



「愛宕グリーンヒルズ」などとグリーンベルトでつながり、自然と調和した「虎ノ門ヒルズ」。森タワーの「オーバル広場」は芝生の開放空間で、春・秋の自撮りスポットとしても定期的に注目を集めている。また「ステーションタワー」には、低層部に利便性・デザイン性を兼ね備えたホテルが開業する予定で。ビジネスライフスタイルに対応した宿泊機能やラウンジなどの付帯機能も充実させ、滞在の目的やシーンに応じて、より広い選択幅をもってスタイル先を選んでもらいたい。



愛宕下通りと桜田通りに新虎通りが交錯する一帯に4つのタワーを建設(うち2棟は竣工済み)。それぞれのタワーの2階部分も歩行者専用デッキでつなげることで、信号や車の往來に邪魔されることなく、スムーズに移動できるようになる。デッキの周辺には緑地が整備され、このあたり一帯が緑豊かな敷地となるだろう。



A
TORANOMON HILLS STATION TOWER
(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー
(2023年7月竣工予定)

B
TORANOMON HILLS BUSINESS TOWER
虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー
(2023年6月11日開業)

C
TORANOMON HILLS MORI TOWER
虎ノ門ヒルズ 森タワー
(2021年6月11日開業)

未来の都市像を見据えた街づくりを虎ノ門から。

すでに開業している「森タワー」「ビジネスタワー」に加え、2023年までに「レジデンシャルタワー」と「ステーションタワー」が建設され、虎ノ門エリアは一変します。4棟の超高層タワーが建つだけでなく、道路や交通網などインフラ整備と一体化し、緑化に注力し、ビジネスからカルチャー、ウェルネスまでも充足させる魅力的な街を創造することで、新しい都市生活のあり方を提案します。

illustration_WinKreative portrait_Yoshifumi Takeda text_Mari Matsubara

D
TORANOMON HILLS RESIDENTIAL TOWER
虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワー
(2021年7月竣工予定)

バーなどほとんどの施設が47〜52階に集まり、東京の街並みを見下ろす眺望の素晴らしい景色をのぞく。一方で、2023年に竣工予定の「ステーションタワー」には、低層部に利便性・デザイン性を兼ね備えたホテルが開業する予定で。ビジネスライフスタイルに対応した宿泊機能やラウンジなどの付帯機能も充実させ、滞在の目的やシーンに応じて、より広い選択幅をもってスタイル先を選んでもらいたい。

WELLNESS
身体を動かし、緑に触れる。訪れる人が思う街づくり

ビジネスの拠点として最大の注目を集める「虎ノ門ヒルズ」ですが、「働くこと」にフォーカスするだけでなく、より充実したライフスタイルを実現させる街づくりを目指しています。そのための方針の一つが、ウェルネスの充実です。4棟の高層タワーはデッキでつながり、それを彩るように豊かな植栽が設けられ、通り抜けるだけで豊かな自然に触れることができます。建物を高層化することで足元には大きな広場が生まれ、都心には珍しい

GOURMET
日常から非日常まで、多様な食のシーンに対応

今年6月に開業した「ビジネスタワー」は、地下1階から地上3階の商業フロアなどに59店舗が誕生し、手土産に重宝なショップや、エリア初の物販フロア、様々なタイプの会食に対応できるレストランが集結しました。中でも注目のが3階

「虎ノ門横丁」です。これまで多店舗展開をしてこなかった東京の名店が26店舗集まりました。路地をイメージしたフロアに各店舗が一律に軒並べ、お客様が店から店へ気軽にトッピングできるような設計になっています。近頃人気の「焼肉」をオフィスやジジネスの足元で味わえるスポットとして話題を呼んでいます。その他、ビジネスシーンに欠かせない手土産をヒルズの観点で厳選・編集したフロアや、選りすぐりのレストラン、高品質なスーパーマーケット「福島屋」もあり、仕事からプライベートまで様々なシーンを満喫できるラウンジ、また「ステーションタワー」にもこれまで虎ノ門エリアにあまりなかったショップが多数入居予定で、「虎ノ門ヒルズ」全体を通じて、幅広いグレードの食をチョイスできるようになっています。ビジネス接待や非日常の食生活を再構築、充実した食体験を楽しめます。

PRESENTATION
超高層タワーの最上層はビジネス・文化・情報の発信拠点

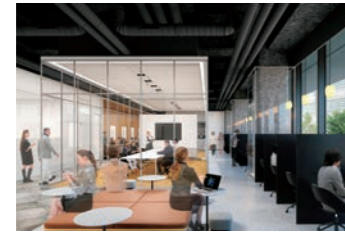
2023年に竣工予定の「ステーションタワー」は地上49階建て。その最上層は、今後世界が注目されるビジネス発信拠点となるでしょう。45階、46階、49階にはギャラリーやホール、フォーラム、屋上ガーデンを併設したイベントスペース、レストランなど、規模の異なるスペースが設けられます。ここは、従来あったビジネス向けカンファレンスやイベントホールの枠組みを超え、あらゆるタイプのシンポジウムや展示会、ショー、パーティーを画期的な形で世界に発信できるユニークな舞台となります。もちろんカルチャー面においても、ファッションショーやエキシビジョン、イベントなどがあふれる文化のメルティングポットになります。今後ますます海外からの耳目を集めるために、あえて東京の真ん中に位置する虎ノ門から発信すること。これまでにないスピードとスケールをもって様々なコミュニティが生まれ、互いに交流する刺激的な場を提供すること。その重要性を「虎ノ門ヒルズ」は担っています。超高層タワーの最上層から放射される人々の活気や新しいことが生まれる熱い気運が、東京を、日本を元気にします。



2023年竣工予定の「ステーションタワー」最上層に計画されているビジネス発信拠点。従来の枠組みを超えた発信が可能で、「虎ノ門ヒルズ」をグローバルビジネスセンターとして形成する計画の礎となる施設だ。タワーのデザインは建築設計事務所「OMA」のバスタード・アール・グレンが、代表のレム・コールハースと共同で担う。



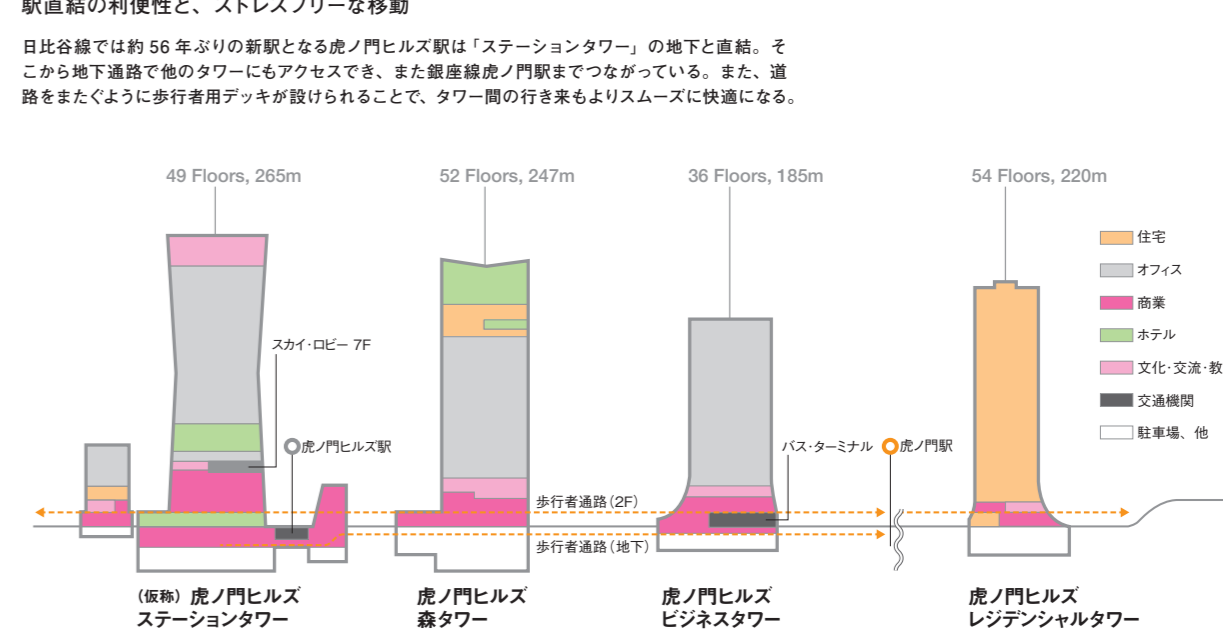
ビジネスタワー「ARCH」運営パートナー「WIL」共同創業者兼 CEO
伊佐山 元
ベンチャーキャピタリスト
WIL 共同創業者兼 CEO



TORANOMON HILLS PROJECT
GLOBAL BUSINESS CENTER

ビジネスタワー&レジデンシャルタワー/外観デザイン
クリストフ・インゲンホーフ
建築家/インゲンホーフ・アーキテクト代表

“緑が少ない東京の都心では特に緑化は重要です。ビジネスタワーではビルの外装の8階まで緑化しました”



駅直結の利便性と、ストレスフリーな移動
日比谷線では約56年ぶりの新駅となる虎ノ門ヒルズ駅「ステーションタワー」の地下と直結。そこから地下通路で他のタワーにもアクセスでき、また銀座線虎ノ門駅までつながっている。また、道路をまたぐように歩行者専用デッキが設けられることで、タワー間の行き来もよりスムーズに快適になる。



PLAY

おままごとなど、ごっこあそびの設定がより具体的になってきたという4歳のひなたちゃん。



FAVORITE

ひなたちゃんが「チュッチュ」と呼んでかわいがる、お世話人形「リトル・ベビーステラ」。



LEARN

「孫で改めて子どもの成長を勉強しています。客観的に見られますしね(笑)」と弘子社長。



みのりさんがデザインした「おやこ休憩室」に、好きなあそび道具を持ってきてもらった。シュタイフのぬいぐるみなど、母子2代で愛用するものも。

BørneLund Story 4

子育て・孫育ての経験をあそびの現場に活かす

知育玩具のパイオニア〈ボーンエルンド〉の取り組みをご紹介する第4弾。創業43年を迎えた今年さらには進化し、新たな分野への挑戦も。その展望について、聞きました。

photo_Kenya Abe edit & text_Ai Sakamoto

買

い物の合間などに、親子で利用できる人気の六本木ヒルズ〈おやこ休憩室〉。パステルカラーを使った空間では〈ボーンエルンド〉の中西弘子社長と、その娘で副社長のみのりさん、孫のひなたちゃんが仲よく遊んでいます。今年創業43年を迎える同社の3本柱は「あそび環境の創造」「世界のあそび道具の販売」「あそび場の運営」。祖母や母として、ひなたちゃんの成長に携わってきたことが、社業にも活かされていると話します。

例えば、「孫のひなたが生まれた当時、乳幼児期に使える道具が少ないことに改めて気づき、

授乳クッションやスリーパーなどを導入。赤ちゃんのお世話や眠りの道具も提案するようになりました」と弘子社長が言えば、「子どもの成長は小刻みで濃密。そこで、室内あそび場『KID-O-KID(キドキド)』の赤ちゃん専用ゾーンで、3カ月周期で揃えていたあそび道具を1カ月ごとに変更するなど、より丁寧に見直すようになりました」とみのりさんが返します。

子どもを取り巻く環境変化を捉えて、新たな取り組みもスタートさせました。これからの子どもたちに体験してほしいアート&クラフトのアイテムや、アクティブ・ラーニングに活かせる

ACCESS

ボーンエルンドショップ六本木ヒルズ店



店内にあるあそび道具の多くを、実際に手に取って試すことが可能。専門のインストラクターが常駐し、あそび方の説明や、あそび道具選びのお手伝いもしてくれる。東京都港区六本木6-10-2 六本木ヒルズ ヒルサイドB2F 03-5770-3390 営11:00~21:00 無休

問合せ先: ボーンエルンド www.bornelund.co.jp

※ 新型コロナウイルスの影響に伴い、ショップおよびおやこ休憩室の一部オペレーションを変更させていただく場合があります。

提案も積極的にしていくといいます。

「これ以外にも、明星大学教育学部の星山麻木教授とともに、子どもの心や発達、特別支援について学べる『発達サポーター育成講座』を立ち上げたり、あそびとスポーツをテーマにした新スタイルの『ボーンエルンドあそびのせかい 有明ガーデン店』をオープンさせました」と弘子社長。

自社運営で長年培ってきたノウハウを活かし、自治体や異業種の企業と協働しながら、子どもの発達に必要なあそび場づくりに積極的に取り組んできた〈ボーンエルンド〉。今年、より進化した活躍が期待できそうです。



NEW YORK

A Chronicler of Cities Looks Beyond

レム・コールハースの“未来”

建築家レム・コールハースが、グッゲンハイム美術館を丸ごと使った『カントリーサイド、ザ・フューチャー』展。都市を考察し続けてきた彼が、未来は今、「田舎」にあると主張する展覧会を打ち出したのは、一体なぜなのでしょう？ 都市生活者が今、手にしておきたい視点やヒントとは？

photo_ David Heald, Laurian Ghinitoiu (portrait) text_ Mika Yoshida & David G. Imber editor_ Kazumi Yamamoto

COUNTRYSIDE

THE FUTURE

amo / rem koolhaas/samir bantal

永久凍土

ゴリラ

自然保護

中国

政権がコントロールするカントリーサイド

ドイツ

USSR

アメリカ

ナチズムと自然礼賛

カタール：一夜で食の自給国に

毛沢東：農民出身の革命家

カントリーサイドと民主化のグラフ

壁一面のクエスチョン

カントリーへの憧憬と雑誌

古代ローマの饗宴

カントリーサイド、ザ・フューチャー展

2020年2月20日のスタートと同時に、大きな反響を巻き起こす。だが現在は新型コロナウイルスの影響で、3月13日より臨時休館中。人の移動や密集度と深く関わるパンデミック、そして本展が説くのが「過疎のもつ可能性」。都市との関わり方が問われる今、コールハースはすでに考えるきっかけを示してくれていた。

レム・コールハースがグッゲンハイム美術館で展示を行うのは、実に42年ぶりのこと。前回は1978年、建築事務所OMAの共同設立メンバーたちと開いた『輝ける都市』展だ。展示したのは、同年に出版されたコールハースの著書『錯乱のニューヨーク』のイラストレーション。同書はマンハッタンこそ人口密集地における都市計画や建築、街の設計における頂点と説き、「マンハッタンニズム」なる新語を生み出した都市考察の金字塔だ。フランク・ロイド・ライトが手がけた名建築で、彼は都市礼賛メッセージを打ち出したのである。

そして2020年2月、コールハースが創った展覧会はその名も『カントリーサイド、ザ・フューチャー』。都市を考察する建築家が「田舎」に注目とは？ そのもとのきっかけは、コールハースが長年休暇を過ごしてきたスイスの村だ。のどかな田舎に、近代化とグローバル化の波が押し寄せる。変容する都市をこれまで追求してきた彼は、急激な田舎の変貌ぶりを突きつけられた。「地球全体のわずか2%に過ぎない都市部に、いまや人類の50%が集中し、2050年には70%に達すると言われて」とコールハースは語る。「都市を長年扱ってきたが、科学や政治や経済、テクノロジーの劇的な変化によって、実はいま最も革新的な進化は残りの98%、すなわちカントリーサイドで起きており、今後の方向性はここにある」と説く。

グッゲンハイムに足を踏み入ると、床から天井まで、テキストやビジュアルが様々なスタイルで散りばめられている。来館者はスロープを登りながら、コールハースがOMAのシンクタンク・AMOや多くの協働者と世界中を巡り、リサーチと研究を重ねた成果を読み解いていく。最初の部屋には、本展に登場する国々とその民主化度をグラフで示した世界地図。横には牛のビジュアル、そしてカントリーサイドを巡る無数の問いかけが壁を埋める。続く2階では、文化を育む余暇の場としてのカントリーサイドを古今東西、紹介する。古代ローマ人がオティウムと呼んだ心豊かな時間や、中国の田園詩人。近年ではヒッピーカルチャーと自然帰郷志向、そして現代のリゾート・ビジネスへと続く。

憧れの対象であるカントリーサイドから、3階では政治やイデオロギーの道具としてのカントリーサイドへ。テクノロジーを始めとする新たな取り組みを4階で紹介し、5階では急速融解する永久凍土など環境破壊を解説する。しかし、ただ警鐘を鳴らす訳ではない。最上階に上がってみよう。現れるのは、オランダのオルタナティブ農業メソッド「ピクセルファーム」や、南相馬市の「福島ロボットテストフィールド」だ。被災地や限定された場所から生まれるイノベーションに、コールハースは注目する。

田舎の可能性に、都市はこれからどう繋がっていけば良いだろうか？ 街を楽しくするために、何を知っておくべき？ 都市生活者が今、手にしておきたい視点やヒントへと、この展覧会は導いてくれる。



コールハースは「建築家、そして物書き」と自称する。なるほど、この展覧会も1冊の「本」のようだ。

PROFILE
レム・コールハース 建築家・都市考察家。1975年OMAを共同創設。代表的中国中央電視台总部ビル。2000年にフランク・ロイド・ライト2004年にはRIBA「ロー・プライズ」を受賞。



木製のブロックをピラミッドのように積み重ねた一角に座る田根。子どもには遊び場、大人には談笑のスペースに。老若男女問わず人が集う場になった。

TOKYO

Past & Future

田根剛の“考察”

自らの設計プロセスを考古学に例え、場所のもつ記憶に向き合うことで未来に繋ぐ建築の姿を探る建築家、田根剛。パリを拠点に国際的に活躍する建築家は東京、そして世界各地の街とどう向き合っているのだろうか。

photo_ Keisuke Fukamizu
text_ Yoshinao Yamada
edit_ Kazumi Yamamoto

パリを拠点に国際的に活躍する建築家、田根剛。その田根が表参道の(GYRE)に昨秋完成させたレストランフロア(GYRE.FOOD)は、室内の床と壁すべてを土で覆い尽くす空間だ。「1,000㎡の巨大なフロアをすべて食の空間にしたいという依頼でした。施設が〈ショップ&シンク〉というコンセプトを掲げて来館者に問いかけを行うことから、ここでもその問いかけを念頭に置いた場を作っています。東京における食の未来を考え、都市における自然との循環がテーマです」

食べ物はずから生まれ、土に還る。田根は人と食を繋ぐ媒介として土を使うほか、テラスにコンポストを設けて土を作る循環の仕組みも取り込んだ。プリミティブな空間から表参道の喧

騒を見下ろし、渋谷や青山のスカイラインを眺める体験は新鮮だ。

「なにより人が生きる場を作りたい。木の塊をピラミッド状に配置した円形劇場のような空間は、自然と人が集まる場となりました。他にも大テーブルや穴蔵のような席など、一つのフロアにいろいろな場がある。こうした場の集合が一つの建築を作ります。どのプロジェクトでも世界に一つだけの建築を作りたい。建築は、近代化のなかで箱や床を作ることを目的化してしまってきたらあります。しかし本来、場を作る行為は土地のアイデンティティを確立していくことではないでしょうか。建築が大地と切り離されることなく、その場にあるべき姿を探ること。その行為は不変だと思います」

田根はこれまでも場所の記憶をもとに、未来へ繋ぐ建築を形にしてきた。エストニア国立博物館では国の歴史と未来を、新国立競技場の設計競技案では森を描いた。最新作の〈弘前れんが倉庫美術館〉では老朽化したレンガ倉庫をふたたびレンガで包むことで記憶の継承を果たす。大型の建築に限らず住宅も含め、歴史や環境、文脈を読みとくことで建築のあるべき姿を探る。田根は自身が暮らす街、パリがまさにその蓄積によって作られた街だという。

「都市のイメージを僕たちは記憶と呼んでいます。そこでしかできない建築を考えたい」

昨秋、パリでは市内の築100年近い一軒家を再生し、渥美創太シェフのレストラン〈Restaurant Maison〉を完成させた。渥美か

ら求められた〈家に招いたような温かな場所〉を実現するため、田根はフランス各地の家庭で使われていた六角形のテラコッタタイルを用いた。これは産業革命以降、工業化されたタイルの角を六角形に切り落とすことで手作業を残そうとしたものだという。フランス各地のさまざまな表情をもつタイルは土を焼くという点でも料理の工程を思わせる和田根は続ける。

「新しさの追求だけでは埋もれてしまうものがあります。記憶を探りながら未来を見出したい」

18歳で生まれ育った東京を離れた田根は東京をよく知らないと話すが、しかし海外から眺めるからこそ、東京が目指す未来には懐疑的だ。「バブル崩壊以降、多くの都市開発がアイデアを持たないまま進められたように感じます。成

長と成熟は同義ではなく、東京は発想する力で都市を描く時代を迎えているのではないのでしょうか。1960年代、丹下健三らの未来を描く建築家が東京に生きる活力を与えてきました。アイデアは世界を変えるモチベーションに繋がります。いまふたたび、モチベーションを取り戻すべき時ではないでしょうか」

田根にとって未来の建築はどうあるべきか。「結果としてコミュニティの形成を助ける建築であっても、僕はそれを超える大きな存在を提案していきたい。(エストニア国立博物館)では時代を超える場づくりを念頭に置き、完成後に人々が建築に触れて変わる姿を目の当たりにしました。おらかな器としての建築を通して、社会に訴えかけるものを作りたいです」

PROFILE

田根 剛 建築家・ Atelier Tsuyoshi Tane Architectsの代表としてYUを拠点に活動。
「Archaeology of the Future」をテーマに国内外で幅広く活躍する。aktarif

GYRE.FOOD

オランダの建築グループ(MVRDV)が基本設計に加わった2007年開業の商業施設(GYRE)。渦や回転するという意味の通り、通りから捨れるような形状で館内に誘う建築の4階に、2019年秋に開業したのが田根の設計によるレストランフロア(GYRE.FOOD)だ。床や壁に土を使ったプリミティブな空間にレストランやカフェ、ショップなどが入る。



photo_Naoya Hatakeyama

弘前れんが倉庫美術館 (2020年/青森県弘前市)

青森県弘前市でプレオープンした、煉瓦倉庫を改修した現代美術館。明治から大正にかけて弘前の風景を形作った近代産業遺産の風景を継承し、もともとの建材をなるべく修復しながら新たな建築を立ち上げている。老朽化した屋根はチタン製屋根材を組み合わせた葺き屋根とし、色は旧シールド工場の歴史を継承してシルド・ゴールドに。館内も建材の質感を重視し、ホワイテキューブからの脱却を図る。

MASTERPIECES OF TSUYOSHI TANE

記憶を掘り起こして生まれる、
未来へ繋ぐための建築



photo_Takuji Shimamura / Image courtesy of DGT.

エストニア国立博物館 (2016年/エストニア・タリトゥ)

2005年、エストニアがソ連支配下時代の軍用施設跡地に国立博物館を建設する設計競技を開催。DGTにより〈メモリーフィールド〉と題して提案、108案から選出され、約10年の歳月を経て竣工。建設予定地に含まれていなかった軍用清走路に着目し、その延長線として接続する長さ350mに及ぶ長大な建築を提案。国の歴史を辿る展示はタイムトンネルのように、未来へ向かう建築を形にした。



image courtesy of DGT.

新国立競技場案 古墳スタジアム (2012年/東京都新宿区)

国際デザイン・コンクールの提出案で、11組のファイナリストの一人として選出された。田根はオリンピックの起源であるギリシャの競技場と古代最大の日本の建造物である古墳が一体となる建築を提案。明治天皇の鎮座の場である内苑と文化・スポーツ振興の場である外苑。時代の変遷で場所の意味を失いかけていた土地に、明治神宮の社と外苑がつながる未来の森をつくらうとした。



2 CODE OF CONDUCT

初日に行われたオリエンテーションの中で、テュンは生徒たちに「これから最終日までの Code of Conduct (行動規範) について説明します」と伝えました。日本語で行動規範という、大手企業の企業理念や、工事現場などの安全管理といったイメージを持つ方が多いでしょう。しかし、SFPCで言うところのそれはどちらかといえばステートメント(言明)などに近い、クリエイティブで柔軟なコミュニティであるためのルール。それは「自由であるためのルール」と言い換えることもできるかもしれません。その中には「All abilities, backgrounds are not questioned (能力やバックグラウンドは問いません)」「No sexism, racism, ableism (いかなる差別も認めません)」「Appreciating diversity and ESL (多様性と第二言語としての英語を歓迎します)」などがありました。



4 Unlearn

テュンが授業やトーク、自身の作家活動の中で頻りに使うこの言葉は、「学びほし」や「脱学習」などと訳され、「何も学習しない・勉強しない」ということではなく、今までの知識を手放し、新鮮な気持ちで物事を考え直す姿勢のことを指しています。ただ教えられた内容を参加者が同じように繰り返すのではなく、それぞれ自分の納得でき

る形、理解に落とし込みやすいイメージを形作ることにしっかりと時間を使い、本当に「自身の表現」のために使えるツールにしていこう、といった流れが、テュンの担当した「Handmade Computer」をはじめ、SFPCYCAMで行われたどの授業でも重要視されていました。意識的だけでなく、何も知らない状態でも簡単に使えてしまうテクノロジー。しかし、だからこそ、基礎的な構造を学び、自分の中に落とし込む作業が重要であり、そこにこそ個を見つめる余地や表現の可能性がある。「UNLEARN」は多くの可能性を秘めた言葉だと感じました。



1 Technology As A Gift

「今回のワークショップのテーマにするのはどうだろう?」とチェ・テュンから送られて来たこの言葉は、私は当初あまり気に留めませんでした。とても耳当たりがよくキャッチーであるとは感じましたが、それ以上の感慨をあまり持ちませんでした。しかし、SFPCYCAMの準備や実施の中で、「贈る相手を意識したテクノロジーの在り方を考察する」と訳したり、彼らがSFPCの活動の中で、

いかに「受動的ではなく能動的に(オーナーシップを持って)テクノロジーと向き合うか」や、「自身と他者を尊重し思いやること(Generosity & Care)とクリエイティブ性の両立」について意識しているかを知り、この言葉の強度と、指し示す意味の射程の長さに感心しました。実施から時間がたち、世界全体が困難な状況に立たされる中で、この言葉の重みを、より一層感じています。

YAMAGUCHI

Creating Together Learning Together

山口情報芸術センター[YCAM]の“学び”

山口県山口市のコミュニティに根ざした活動を通して、グローバルなネットワークと評価を獲得する山口情報芸術センター[YCAM]。昨年の夏に行ったNYの学校「SFPC」によるワークショップでスタッフが見つけた、新たな学びをもたらす「7つのキーワード」とは?

text_ Keina Konno photo_ Naoki Takehisa
Courtesy of Yamaguchi Center for Arts and Media [YCAM]
illustration_ Takahiro Shimada

3 CULTURE AS A HUMAN RIGHT

前述のオリエンテーションのなかで、Code of Conductと同じく印象的だったのが、Cultural Rights (文化的権利)という考え方でした。これは「文化にアクセスできることを人権の一部として捉える」というアイデアです。このアイデアに基づけば、アーティストには Cultural Ambassadors (文化大使)としての責任があり、この人権を守る活動に寄与する義務があることになりま

す。社会的な立ち位置からアーティストの機能や役割を考えることは、恥ずかしながらアートセンターと呼ばれる場所で働く私にとっても、見過ごしやすい観点の一つです。それほどに、日本におけるアートやアーティストは社会や生活から遠い存在として位置づけられていると改めて痛感します。クリアな言葉で語られるアーティストの社会的責任は、私にとっても生徒にとっても刺激的でした。

SFPCが掲げるモットーの一つで、「デモ的でなく、より詩的に」と言ったところでしょうか。この言葉には、MITメディアラボが掲げる「Demo or Die (デモでなければ死)」へのカウンターという意味合いが少なからず含まれています。デモをすること(技術的新規性や革新性を証明すること)以外にも「テクノロジーの生き残り方」は存在する、そんな優しくも強かなSFPCの姿勢が見える、と私は感じました。

5 MORE POETRY, LESS DEMO

ワークショップ「SFPC Summer 2019 in Yamaguchi」をなぜ企画したのか?

山口情報芸術センター(以下YCAM)では「ともに作り、ともに学ぶ」という言葉を掲げ、各ジャンルのアーティストや研究者、テクノロジストとともに様々なメディアアート作品の制作を行ってきました。同時にエデュケーションの分野においても、メディアテクノロジーやアート・ソッドを思考起点とした「学校ではない、アートセンターならではの学びの場づくり」のために、日々奮闘しています。そんなYCAMで働くなかで、「School for Poetic Computation (以下SFPC)」を知り、さらにその現場であるNYの彼らの学校を見学する機会を得た私を驚かせたのは、彼らの空間の持つ独自の雰囲気でした。

SFPCは、基本的には25歳以上の人(自身のバックグラウンドが確立している人)をメインとした学校です。大人を巻き込むアクティブなコ

ミュニティの形成、そしてその維持は、容易なものではありません。大人の時間にはどうしても(責任)が伴うのはもちろんのこと、さらにそのコミュニティで行われるのは、生徒自身のアート活動のための純粋なトライアル、無邪気なプロトタイプング、そしてそれらを通じたトライ・アンド・エラーの学び。直接的に定量化できるわけでも、資産的価値を生むわけでもありません。彼らは、そんなウルトラCを目の前でいとも軽々とやってみせ、さらにそのコミュニティを広める画策までしていたのです。YCAMがより柔軟に、真の意味で「ともに作り、ともに学ぶ」ための場所となるために、彼らのやり方を深く学ぶ必要がある、と強く感じたことが、彼らをこの山口の土地に招き、SFPC Summer 2019 in Yamaguchi (以下SFPCYCAM)を実施した理由です。

6 HOW TO MAKE → WHY TO MAKE

これは「SFPCの授業の特徴」として生徒が述べた言葉なのですが、図工などの授業にしても、教育機関以外で提供されるワークショップにしても、果たして「なぜ作るか?」という疑問を取り扱っているものがどれだけあるでしょうか。「なぜ作るか?」は「どう作るか?」よりも前に問われるべきではないか。この順番的な矛盾こそが、教育の中の「ものづくり」に立ち込める違和感の元凶なのではないか。以前個人グループでのワー

クショップの中で、小学校低学年の女の子に「何を作りたい?」と質問したところ「作りたいものがわからない」と泣かせてしまった経験があります。「考えたことがないからわからない」と泣き続けるその子を宥めながら、「怒っているわけではないこと」「あなた自身の楽しい事や状況から一緒に考えていきたい」という意図を伝えるのはかなりの時間を要しました。「Why to Make」こそ訓練を必要とするのかもしれない。

7 Dandelion

生徒への“Gift”としてオリジナルTシャツを作るに際して、何気なく共有したタンポポの写真をテュンがいち気に入ったため、デザインに使うことになりました。なんの要旨も飾り気もないその写真をなぜ気に入ったか分からなかったものの、メンバー全員の満足いくTシャツが出来上がったことに胸をなでおろしていました。最終日に、生徒やスタッフがそのTシャツを着て見守る前でテ

ンが語ったのは、「Decentralization (分散、集中排除)のシンボルとしてのタンポポ」でした。「タンポポの綿毛の移動には国境や格差などのボーダーは関係なく、どこへでも移動し、根を張り、花を咲かせ、また綿毛を飛ばすことができる。そんなテクノロジーを考えたいし、それこそが『Technology as A Gift』だと思う。いまもTシャツに袖を通すたびに、この言葉を思い出します。



W: ワークショップ
C: クラス
D: ディスカッションフォーラム

SFPC

Summer 2019 in Yamaguchi
2019.9.4-11
@YCAM

DAY 1

Introduction
Goal Setting
Welcome Party

DAY 2

“Gestures inspired by hand sign ①” w
“Handmade Computer” c
“Peer to Peer Poetry ①” c

DAY 3

“Gestures inspired by hand sign ②” w
“Playing The World ①” c
“Garden mathematics ①” c

DAY 4

“DNA bar CODING” w
“What is poetic computation?” d

DAY 5

Field Research
大嶺酒造 / 秋吉台

DAY 6

“Gestures inspired by hand sign ③” w
“Peer to Peer Poetry ②” c
“Playing The World ②” c

DAY 7

“Gestures inspired by hand sign ④” w
“Garden mathematics ②” c
“Distributed Web of Care” c

DAY 8

Final Showcase
- Student Talks
- Exhibition Time
Graduation Party



世界各国からの応募に対して、できるだけ属性が多様になるよう選考を行い総勢20名が参加した。

コミュニティは生まれるものではなく、つくるもの。



みんなの頼れるアニキ、ブライアン (写真左)。シェイプの技法を新人スタッフへ伝授している真っ最中(中央)。バーバーが男の聖地だったのは、いまや昔話。コターではカッコいい女性たちがのびのびと活躍する。

コター

理容メニューはバズカット、ヘアカット、レザー・シェイプにホットタオルトリートメント。キッズの散髪も、ヒゲのトリミングもある。理容師はケイ・キムラはじめ9名、バリスタは看板娘のアシャー以下フロントと合わせて計7名。オリジナルのコヒー豆はNYみやげにもよし。321 Graham Ave., Brooklyn, NY / ☎ (1) 347-987-4562 / 8時~21時(土・日~20時) / 無休 / 最新の状況はウェブサイトで。www.cotter.nyc



NEW YORK

Brian Keeps It Together

ブライアン・バーナムの“夢”

ここで常連と呼ばれたい! そう思える店が近所にあると、毎日はぐっと楽しくなります。ブルックリンのバーバー&コーヒーショップ、コターはなぜ人を惹きつけるのでしょうか?

photo_Blaine Davis text_Mika Yoshida & David G. Imber edit_Kazumi Yamamoto

おしゃれなヒゲ青年が散髪に来たかと思うと、カウンターでは出勤途中のビジネスウーマンがカプチーノを注文中。男前な女性バリスタが淹れる一杯を手に、颯爽と出かけたところへ、別のご近所さんが愛犬に引かれ入ってくる。

コターは、ブルックリンの地元民にこよなく愛されるコーヒーショップ兼バーバーだ。理髪師たちの腕はもちろん、気立ての良いスタッフたちの笑顔や、ゆるやかな雰囲気も魅力のひとつ。オーナーはカリフォルニア出身のブライアン・バーナムだ。「地元の常連に愛される場所

を作りたい」との夢は、近所で見かけた古い建物にホレ込むところから始まった。ここでコヒースタンドを開き、まずは大成功。次に何を加えよう? ブライアンが閃いたのが、男のグルーミング、すなわちバーバーだ。かつてタトゥーバーラーを仕切った彼だけに、同業者が居並ぶ中わざわざ足を運びたい、と思わせる店づくりはお手のもの。グリーンポイントに開いた2店舗目も内装はすべてブライアンの手作りだ。レトロな理容椅子は100年前のヴィンテージチェア。8脚のうち使えるパーツを自らつぎはぎ

して4脚にリストアし、昇降機能を加えたと言う。持ち前のセンス、そして開拓民の子孫であるカリフォルニア人ならではのDIY精神でこしらえた空間に、老若男女が惹きつけられる。昼間、店でレモネードやコーヒーを楽しんだ子供や女性は、パパや夫に面白いバーバーがあったと家で報告し、家族ぐるみのお馴染みさんがいつしか増えていく。ちなみにコターとはくさびピンのこと。人と人をつなぎ、暮らしを結ぶ。コミュニティは生まれるものではなく、作るもの。ブライアンはそう教えてくれる。

PROFILE
ブライアン・バーナム 飲食業やタトゥーバーラーで経歴を積み、2015年カリフォルニア州に1店舗目を、2019年にグリーンポイント店をオープンした。シェイプの達人。

植物と過ごす、TSUBAKIの「場づくり」



photo_Mitsuki Takeda

左上/2019年の展示会「TSUBAKIの場づくり」より、倒木の枝を集めて大樹のように再構築し、植物の生命力をダイナミックに表現。左下、葉山の古民家で行った結婚式のしつらえ。新郎新婦が愛する吉野桜を2月に咲かせ、その下でゲストとともに過ごす場をつくった。右上・右下/「美しい花は一瞬でその場を幸せにする。まるで香水のよう」と山下。

TOKYO

Essence of Botanical

TSUBAKIの“美”

自然の植物は美しくたくましい。けれど都会ではその姿が見過ごされがちでもある。〈TSUBAKI〉の2人が目指すのは、植物や花の魅力を引き出して、生き生きと見せる「場」をつくること。緑の美を通して東京の景色を豊かにすべく、フル稼働の毎日だ。

photo_Tetsuya Ito text_Masae Wako edit_Kazumi Yamamoto

TSUBAKI

自宅用や贈り物として楽しめる予約制の花材の宅配便「季節の花だより」のほか、写真の「OYAMA」など屋内ビオトープも考案。

緑の苔と草で覆われた小さな山が、宙に浮かんでいる。「OYAMA」という名の屋内ビオトープを考案したのは、ボタニカルアレンジメントを手がける〈TSUBAKI〉の宮原圭史と山下郁子だ。「東京のような都会に暮らす人にこそ、自然本来の姿を感じてほしい」と、植物にまつわる活動を始めたのは2014年。海外の老舗メゾンからも声がかかるセンスを生かし、ウエディングやイベントの生け込みから個人邸の造園まで、さまざまな「場」をつくることで植物の生命力を表現する。

「植物も花も、自然のままの姿は尊い美しい。でも、人が少し手を加える、つまり“表現する”ことで、自然のままでは見過ごされてしまいがちな植物のたくましさや美しさを際立たせることができる。気づいてもらえる可能性が広がると思うんです」と山下は言う。たとえば2019年には、「場づくり」と題した展示会を開催。台風で折れてしまった梅の木の枝を集めて組み合わせ、新たな一本の大樹のようにしつらえたり(写真左上)、完全予約制の人気店〈菓子屋このつ〉の満口実穂や国際的

な陶芸家の浜名一憲とともに茶寮空間を演出したり。ひとかかえもあるほど巨大な浜名の壺には、東京の片隅にひっそり生えていた雑草のセイタカアワダチソウを大胆にアレンジ。自然がもつ力強さを残しながらも、アーティスティックな美しさで人の目と心を惹き付けた。宮原と山下は口を揃えて言う。「美しいことを大切にしたい。感情をゆさぶるものをつくりたい。きれいなものに触れた時以上に人の心を強く動かし、幸せを感じさせることってないと思うから」

PROFILE
つばき 宮原圭史と山下郁子。2014年に都内ラフォーレショップから独立した山下が立ち上げ、2年後に宮原も参画。目黒区に予約制アトリエを開業。tsubaki.tokyo.jp

目指したのは、もっとアートを街へ近づけることでした。

ギャラリースペースだけで従来の30%も増床した、新生MoMA。新たな棟が加わったかと思えば、モネの名画「睡蓮」に専用ギャラリーを設けるなど、大小さまざまなスケールでかつてないMoMAの表情が味わえる。中でも驚かされるのが、外に開かれた美術館への変貌ぶりだ。

MoMAといえば、ニューヨーカーの大半にとっては内部の動線はもちろん、どこを曲がるどんな空間が目飛び込むかも体が覚えているくらい、なじみ深い空間だ。母校の校舎のようなMoMAをリニューアル後に訪れたニューヨーカーそしてアート好きの旅行者が口にしたのは、「懐かしいのに新しい」。そして多くが「街との一体感」を魅力のひとつに挙げている。

来館者は中庭に面した窓が一面ガラス張りのギャラリーで作品を鑑賞しながら、いつのまにか周囲の街並みも眺めているのに気づく。中庭の彫刻を見おろしたり、向かいに建つ教育リサーチ棟にいる人々の動きを眺めたり。パフォーミングスペースでは、窓の外で刻々と変わる光の加減や天候も、ライブパフォーマンスの一部

NEW YORK

DS+R: New Lines of Sight at MoMA

ディラー&スコフィディオ+レンフロの“眺め”

2019年秋に大リニューアルを遂げた、ニューヨーク近代美術館。これまでになく、街へと開かれたMoMAが誕生しました。設計を手がけた建築事務所ディラー&スコフィディオ+レンフロが目指したものは、一体何でしょう？

photo_ Nicholas Calcott
text_ Mika Yoshida & David G. Imber
editor_ Kazumi Yamamoto

と化す。

単に眺めの良い美術館だけならいくらもあるだろう。しかし歴史や文化の堆積を、多層な時間軸で切り取って見せてくれる都市・NYを肌で感じながらのアート体験は、新生MoMAならではのと言える。

設計を手がけたのはディラー&スコフィディオ+レンフロ(D&S+R)。美術館やパフォーマンスセンターなど数々の文化施設を手がけてきた彼らが躍その名を轟かせたのが、2009年竣工のハイラインだ。ミートパッキングからハドソンヤードまで、マンハッタンを南北に貫く空中遊歩道。「まさかNYでのんびり歩きつつ街を縦断できるとは！」驚嘆と共に迎えられ、その後全米の自治体の手本にした画期的な建築だ。緑と都市に囲まれながら歩く楽しさをハイラインで示したD&S+Rは、MoMAでは何を指したのだろうか？

プリンシパルの一人、エリザベス・ディラーはこう語る。「MoMAとの最初の打ち合わせで、私たちは『もっとアートを“街”へ近づけましょ

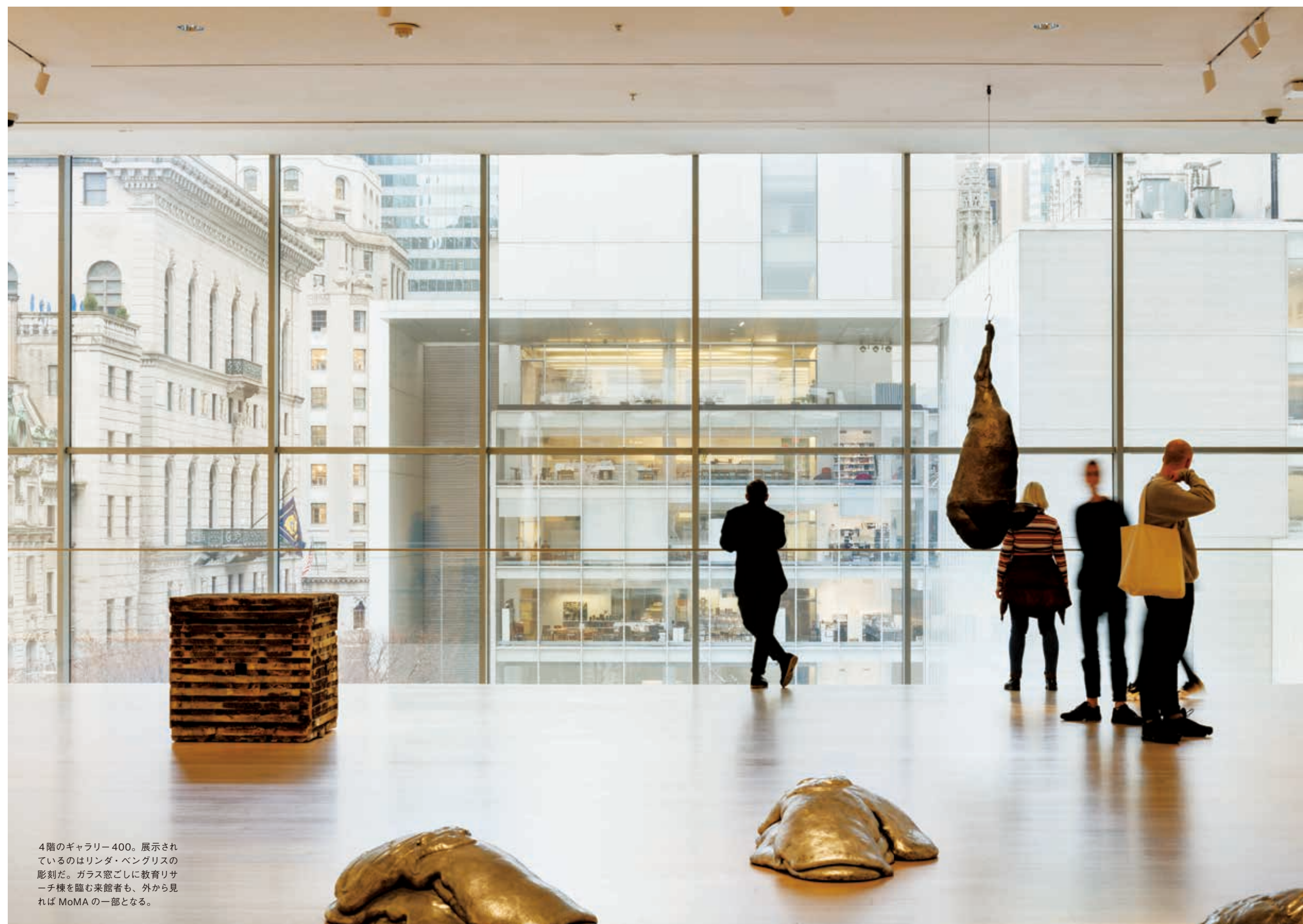
う』と訴えました。美術館の入り口から延々歩かせた挙げ句ようやくアートに出会うことができる、そんな美術館は無しにしませんか、と」。特に力を入れたのが公共空間、そして街に面した部分だという。特にMoMAの顔に当たる53丁目目については「これまでMoMAを訪れると一番目についたのが、ショップでした。これを吹き抜けの半地下へと移し、ストリートから自然光が注ぎ込む、高さ2フロア分の広々としたスペースを作りました」。その横には路上から鑑賞できるパブリックギャラリーも新設した。もちろん無料で鑑賞できる。

アート空間が外界へとあふれ出し、ストリートの活気も内部へ取り込まれて鑑賞体験の一部となる。最初の建物を設計したグッドウィン&ストーンに始まり、フィリップ・ジョンソン、シーザー・ペリや谷口吉生まで、当代きつての建築家が腕によりをかけて継承してきたMoMA。D&S+Rは彼らへ敬意を払いつつ、従来の「美の密閉空間」から、外界とゆるやかにつながるミュージアムを生み出したのである。



ニューヨーク近代美術館 (MoMA)

ストリートとつながりあう表部分。吹き抜けの半地下にショップ、一階にはラウンジを。アート鑑賞後、余韻に浸れる場所が増えたのも今回の特長だ。MoMAは1929年設立。(The Museum of Modern Art) 11 West 53 St., New York TEL(1)212-708-9400。入場料25ドル。10時~17時30分(金~21時)。無休。最新状況はウェブサイトで。www.moma.org



4階のギャラリー400。展示されているのはリンダ・ベングリスの彫刻だ。ガラス窓越しに教育リサーチ棟を臨む来館者も、外から見ればMoMAの一部となる。



エントランス。前と変わらないような……？ いやいや、ガラス部分も上に拡張していることで、中がより明るくなった。キャノピーも加わって、キリリとお出迎え。

PROFILE
ディラー&スコフィディオ+レンフロ NY拠点の建築事務所。ボストンの「CA&LA」のサブフロアを拠点とする美術館、リブカー・センターの増築やサ・エレットを手がける。

都市の屋上は独自のエコシステム。農業好適地なのだ。



スー・レ・フリーズ

2014年に発足した都市農業の共同組織。新しい独自の技術によって、老舗デパートの屋上を始めとする大規模な都市農園をパリとその近郊、さらにアヌシー、リヨンなどでも展開し、これからの農業のありかた、都市の快適な環境づくりに一石を投じている。収穫した作物は、地産地消されるだけでなく、地元のアルチザンたちとコラボレーションして飲み物、お菓子などを同ブランド名で商品化している。

自身が開発したグリーンウォールの前に立つヨアン・ユベール。



photo courtesy of Sous les Fraises

PARIS

Roof Top Garden for Urban Agriculture

ヨアン・ユベールの“オアシス”

環境問題への意識が高まりを見せるパリ。市庁舎前のデパートの屋上にはなんと1,500㎡の農園が作られている。緑化ムーブメントをリードする団体「スー・レ・フリーズ」が取り組む、地面を必要としない画期的な農法とは？

text & photo_ Harue Suzuki edit_ Mari Matsubara

左：蔓状に上へ上へと伸びてゆくのはホップ。これを材料にして、パリ市内にある地ビール醸造所で作ったオリジナルのビール3種類も販売されている。

右：ビールにジン、スナック、ヌガー、ボンボンなど「スー・レ・フリーズ」のレパートリー。市内十数カ所で販売されているほか、インターネットでも購入できる。



マロニエやプラタナスの街路樹だけがパリの緑ではない。2016年にパリ市がスタートさせたプロジェクト「Parisculteurs (パリキュルター)」は、市内と近郊で2020年までに100ヘクタール(東京ドーム21個分)を新たに緑化することを目標に掲げたもので、しかもその3分の1は都市農業に充てるという大胆なものだ。以来、公共施設や企業、さらにはバスターミオのオペラ座の屋上にも菜園が出現するなど、思いもよらぬところでパリの緑化が進んでいる。このムーブメントの先駆けと言えるのがヨアン・



緑の膜を張り巡らせた“農園”。水は膜の下で受け止めて繰り返し使用。屋上から水漏れという心配はない。

ユベールとローリン・ジャキエが立ち上げた「スー・レ・フリーズ」。彼らのコンセプトがパリ市の目にとまり、花の都を代表するデパートのひとつ「ギャルリー・ラファイエット」の屋上をいちごの園にするという形で衆目を驚かせたのが2015年のこと。2017年にはパリ市庁舎前のデパート「ペー・アッシュ・ヴェー」の屋上にもさらに大規模な菜園を作り上げた。「スー・レ・フリーズ」つまり「いちごの下で」というなんとも詩的な名前は、作物の枝の下に都市が見えるという具体的なビジュアルイメージからきている。菜園の場所が屋上にあるというだけでなく、作物は垂直方向に植えられて、枝垂れるような格好で実る。しかも地面を必要としないという点が秀逸だ。

農学と生物学を修めたユベールは2000年に地元グルノーブルの産業荒地で育つ植物の研究を始め、地面以外の場所での植物育成を実践した。2007年には土壌外耕作のアソシエーション(AFCH)を立ち上げると同時に、垂直方向の耕作を可能にするバイオテクノロジーの特許を申請。それが「スー・レ・フリーズ」のコンセプトの元になっている。仕掛けは、羊毛と麻で作ったタピスリーのような膜。その表面にポケットを作って様々な植物を植えてゆくのだ。写真の「ペー・アッシュ・ヴェー」では、

およそ1,500㎡の垂直菜園が豊かな緑に覆われている。作物の種類は多岐にわたり、野菜やハーブ、食用花、ビールの原料になるホップまである。数にして22,000株。トマトだけでも1,000株あって、1株あたり5〜7キロのトマトが収穫できるという。また、一枚の膜にさまざまな種類が植わっているというのも大切なことで、水が膜を通じて異なる作物の根っこを巡るので、植物間のコミュニケーションが生まれ、それが個々の植物の耐性に有効に働く。つまり、作物を植木鉢に入れて育てたり、一種類の作物だけが集中して植えられている畑にもない、独特のエコシステムが都会の真ん中で繰り広げられているという具合なのだ。

「都市は農業の好適地」と、ユベールは言う。都市では周辺部に比べて冬が暖かいために収穫期が長い。「3月に始まり、12月まで収穫があつてラズベリーが採れたりします。つまり都市独特の気候環境によって温室のような効果もたらされるのです」

彼のもとには、この都市農園を積極的に取り入れたいというたくさんの企業家たち、そして経済など様々な異なる分野で学んだ若い人たちが集まってくるという。パリの「いちごの下」から、人と農業の新しい関係性を築こうとする気運が広がりはつづける。

想像以上に豊かな大都会の真ん中の実り

作物の多様性もコンセプトのひとつ。日照に恵まれているだけでなく、吹き抜ける風のために病害が少ないというの屋上の利点。ボンビドゥーセンターを見下ろす場所には養蜂箱もあり、美味しい蜂蜜が採れる。



photo courtesy of Sous les Fraises



パリ市庁舎向かいの「BHV(ペー・アッシュ・ヴェー)」。この屋上に農園がある。 photo: Getty Images



Interior Design

Masamichi Katayama

Wonderwall®

虎ノ門が昔は大層敷街だったことになぞらえ、「日本」を意識したデザインに。既存のオフィスの概念を打ち砕き、新しいワークスペースが誕生。

豊富な起業経験やスタートアップ支援の実績を活かし、「ARCH」ではスクールやイベント、講演会など様々な企画を提供して、異業種企業間の交流を活性化させる。

hair & make-up_Aki Kudo



最高級スピーカーを天井裏に取り付けて壁面にハウンスさせることで響きが上質になる。誰でも利用できるカフェでその「一期一聴」の音を体感したい。

Sound / Visual

Ichiro Yamaguchi

Setsuya Kurotaki
NF + Daito Manabe
Rhizomatiks Research

TORANOMON

Incubation Center in Toranomom Hills

全く新しい発想の新事業創出センター誕生

「虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー」4階フロアに開設されたインキュベーションセンター「ARCH」はただの“シェアオフィス”ではない。大企業の新規事業部門だけを会員とした全く新しい運営方針と、場の魅力について、3人の参加者に話を聞いた。

interview & text_Mari Matsubara photo_Koutarou Washizaki

ARCH

日本を代表する大企業の新規事業部門や企画部門などが出島として入居し、業種の壁を超えて交流・連携することで、新たなイノベーションを創造するインキュベーションセンター。ワークスペースやミーティングルーム、スクールルームなど多様な利用目的に合わせた空間が備わっている。森ビルと共に企画運営を担うWILが、事業立ち上げのノウハウや企業間交流のためのコンテンツを提供しサポートする。こうした形の新規事業促進施設は世界的にも初めての例だ。

Supervisor

Gen Isayama

日本独自のイノベーションエコシステムの拠点



仕切りのないワークスペースでは情報を共有し交流を図る。デスクなど家具も洗練されている。

INTERVIEW 1

ワンダーウォール代表 サカナクション NF 主宰
片山正通 × 山口一郎

「空」と「間」を意識したデザインに「気配」を感じる唯一無二の音

「ARCH」のインテリアデザインを担った片山正通氏と、新しい音楽の可能性を追求するミュージシャンの山口一郎氏はプライベートでも旧知の仲。以前から空間と音楽の関わりを語り合っていた2人に協働する機会が巡ってきた。

片山(以下K) 空間では、目に見える“形／素材／色／光”だけでなく、見えない“匂い／音”も構成要素となります。人と人がより深く関わるこの「ARCH」では目に見えない要素の必要を感じ、山口一郎氏に相談したのが始まりです。山口(以下Y) ライブもそうですが、スピーカー

をどう設置するか、どんな場所にどんな音を鳴らすか、ということには前からこだわってきました。街の中や店舗で聞こえてくる音の質も気になってしまふ。だから今回、片山さんのデザインされた空間に「音」で携われるのは僕にとって願ってもないチャンスになりました。

K「ARCH」ではコミュニケーションの在り方をデザインする必要があると感じて、思い着いたのが大学のキャンパスのような場でした。学生は思いの場所を見つけては議論しますし、互いの存在が刺激を生み出します。なので、ここでも様々なタイプの場を設け、ガラスで仕切った互いの気配を感じやすしたり、例えば廊下やトイレなど主従で言えば「従」と考えられていた空間にもユニークなキャラクターを与えたり、あらゆる所でコミュニケーションが生まれるよう考えました。これは、実は日本建築における「空」や「間」の概念から着想したものであるのです。

Y 片山さんの「空」や「間」の思考を受けて、僕はそこには「気配」のような音がふさわしいと直感しました。無意識のうちに、どこから発しているのかわからないような心地よい音を感じてもらいたい。ビルの中にいながら、季節や温度を音で感じてもらいたいと思いました。そこで「ライゾマティクス」の真鍋大度さんに技術面でサポートしていただき、季節やその日の天候、温度や室内にいる人の密度などを感知してデータ化し、それを元にあらかじめ素材として与えた音をAIがアレンジするというシステムを開発しました。春の風を感じる音、夏の夕立の音、雪の音……聞こえ方は「ARCH」の中のどの場所にいるかによっても違ってきます。

K 単なる音楽や音ではなく、音を生み出す環境の提案は想像もしなかったので驚きました。Y 正午にはある特定の音を流すとか。毎日ここで働く人には気づいてもらえるような。

K デザイン面でも世界で働く人が集う場だからこそ日本を感じられるように、伝統的な数寄屋の考え方を取り入れています。利休が竹を切って花入れに見立てたように、躯体の柱や天井をありのまま見せ、日本の美意識を表現しました。そこに漂うのがNFの音。僕は伊勢神宮の式年運営を思い出します。建物は更新しつつ概念は継承しますよね。この音も変化しつつ一貫した美意識があり、日本を感じました。

Y 音楽は音楽だけで閉じているのではなく、文化や社会と関わっていくべきだと考えていたので、今回はそれを実現でき、かつ刺激的で大きな試みになって嬉しいです。

K 人々がともに過ごす中で化学反応が生まれるこの「ARCH」という場所を考えた時、意識レベルで訴える音の存在はとても大きいと思いました。我々の作り上げた空気感が素晴らしいビジネスを生む一助となればとても嬉しいです。

INTERVIEW 2

WIL 共同創業者兼 CEO
伊佐山元

異業種の技術を掛け合わせて初めて革新的な事業が生まれる

シリコンバレーを拠点にベンチャー投資、事業創出支援を行うWIL共同創業者兼CEO・伊佐山元氏が森ビルと共同で企画運営する「ARCH」とは、一体どんな場所なのだろうか？

「日本でも金融危機以降ますますベンチャーの気運が高まってきています。個人レベルで起業する人のための講座やノウハウ本の充実が目ざましく、シェアオフィスなどの環境はだいぶ整ってきました。大企業も、世界を相手とした企業間競争に勝つために新規事業に注力するところが増えています。しかし、起業体験のない大会

社は一切何から始めればいいのか、悩みが多いのも事実です。「ARCH」は大企業の新規事業部門だけを会員とし、出島としてのこの場所で我々が有益なコンテンツを提供することで、より効率的に事業創出を成功させるのが目的です。このセンターの最大の特徴は、共有エリアが充実していることだ。各社専用のワークスペース以外に、会員以外でも利用できる広々としたカフェラウンジや、パーティーに使えるようなスペースなどが設けられている。オフィスというよりも、お洒落なサロンのような雰囲気だ。「仕事が終わった後に異業種の人同士がカフェで交流することで、抱える問題点やアイデアを共有し、そこから新しい仕事生まれる。異なる技術を組み合わせないとイノベーションは起きないのです。常に新しいことが起こり、ビジネスの未来が広がり、海外資本も吸引する。そんな国際的な街づくりを先導する場なのです」

SENEGAL

Sowing the Seeds of Community

森俊子の“種子”

セネガルの首都ダカールから、車と小舟で10時間。ファスという小さな村に初の小学校ができたのは2019年のこと。建築家・森俊子が設計したのは建物だけではなく、差し出されたのは、伝承文化の誇りを未来へつなぐ、明るいヴィジョンです。

photo_ Iwan Baan
text_ Mika Yoshida & David G. Imber
edit_ Kazumi Yamamoto



上:文化センター「スレッド」。当地古来の茅葺きにドイツのエンジニアリングを、骨組みに日本の竹組み技術を加えることで、地元の良さが引き出される。
下:「ファス・スクール」も「スレッド」も診療所に隣接。公衆衛生教育もルコルサの重要な目的。エボラ熱の発生時にも、担当者の奮闘で感染拡大を防いだ。

日干しレンガでできた円形の建物に、茅葺きの屋根がゆるやかなカーブを描く。ミニマルな美しさが目を奪う「ファス・スクール」は、村にとって初となる学校だ。5才から10才までの児童が、現地のフラニ語やフランス語の読み書き、体育、料理や大工技術を学ぶ機会を得る。それまではコーランを教える寺子屋のみ。男女共学もまだ馴染み薄いというほど、昔ながらの価値観に則って暮らす土地柄である。設立したNPOルコルサは実に7年にもわたり、地元のイスラム教指導者との話し合いを重ねたという。彼らの文化や習慣を壊すのではなく、教育を通じて広い世界へとつなぐ手助けを。ルコルサの設立者ニコラス・F・ウェバーは、パハウス出身の美術家にして偉大な教育者、故ヨセフ・アルバースの財団で代表を務める人物だ。スクー

ルに先駆け、同じくセネガルに完成したのが風景と一体化する文化センター「スレッド」。ウェバーは双方の設計を森俊子に依頼した。住民が歌や踊りで集い、市場としても使える交流の場、そして外国の芸術家が滞在することで相互刺激や発見を豊かに育む「スレッド」は世界から絶賛を博す。伝統的な日干しレンガや地元の茅を用いるのは、資源に乏しい当地でも住民が自らメンテナンスできるように。茅の屋根にたまった雨水は、地元の生活用水に活用できる。スクールにも応用された数々の手法の源には、気高いセネガル人へ対する森の深い尊敬の念がある。常に危険と隣り合わせの辺境地を移動しながら、年月をかけて現地リサーチを重ね、一切無報酬。「スレッド」そして「ファス・スクール」は美しくも尊い建築なのである。



スレッド&ファス・スクール

スレッドはマリとの国境にほど近いシンシアン、スクールはダカールからガンビア川を越えたファスというどちらも辺境の村にある。これまで外界との接触が乏しかった場所に、突然よその文化や人が入ることで地元へ及ぶ影響力は計り知れない。その点も常に配慮しつつ慎重にプロジェクトを進めた。www.tmarch.com

PROFILE
森俊子 1995年よりハーバード大学教授に就任。2002～2008年建築学部部長を務める。現在は建築教育振興委員のトラスダウンス委員、米芸術文化振興会の委員に選出。

CAMBRIDGE

text_ Tim Rowe
photograph_ Michael Ochs Archives/ Getty Images



C.J.C. Report

Social Hub for The Community

ティム・ロウの“物語”

映画や文学に対する造詣の深さでも知られるCIC創設者のティム・ロウさん、世界最大級のイノベーションコミュニティの着想を得るなど、自身のライフスタイルや活動に影響を与えた作品を3つ挙げるとすれば？

若い頃に心奪われたハンフリー・ボガート主演の映画「カサブランカ」です。舞台は第二次世界大戦初期のモロッコの街カサブランカ。ボガートが演じるアメリカ人リック・ブレインの経営する「カフェ・アメリカン」は、ヴィシー政権に協力するフランス人やドイツ軍将校からレジスタンスの

戦闘員までが集まる中立的な社交場。敵同士が言葉を交わし、問題を解決したりする場所だったんです。以来、私はあの映画に出てくるリックになることばかり考えていました。テクノロジーオタクだった私は、MITの近くにあんなカフェを作り、科学者や教授や起業家たちが集まってアイデアを交換できるような場所にしたいと妄想し続けた結果、イノベーターや起業家のための共有スペースであるCICが生まれました。そして10年ほど前にはそこにベンチャーカフェが加わり、リックになるという夢を実現することができたんです。

私の興味は社会がどのように機能しているかを探ることですが、その一つの方法は、さまざまな可能性のある未来を描くSF小説をたくさん読むことでした。中でもロバート・ハイラインの「異星の客」は別格でした。火星でのミッションに失敗して置き去りにされた男の話で、平和な火星の社

会に育てられたのち地球に戻った彼は、蔓延する憎しみや暴力に戸惑いつつ、非暴力や他者への思いやりの哲学に触れ、社会をより良い方向に変えることに乗り出すというものです。この本を通して、人を助けることはもちろん、アイデアによって社会は根本的に変えられるのだと感じました。

もう一冊は、ウィリアム・ギブソンの『ニューロマンサー』(1984)。東京を舞台に人工知能(AI)が人間と企業に大混乱をもたらす物語は今やお決まりの展開ですが、当時は本当に斬新でした。この作品が切り開いたサイバーパンクというジャンルは、SFに「リアリズム」をもたらすと同時に、私の中に「テクノロジーがもたらすリスク」という疑問を芽生えさせ、社会としてどのように管理すべきかを考えるきっかけを与えてくれました。初期のサイバーパンクと言える映画『ブレードランナー』も、もちろん私のお気に入りです。

PROFILE
ティム・ロウ CIC創業者兼CEO。高校時代に父親の会社の東京支店をプロローグとして働き、同社社内に理問屋、大学卒業後は三菱経済に勤務すると日本とのつながりも深い。



カフェのピアノマン(ドゥーリー・ウィルソン)が「この幸運が長続きしますように」と、ホール中の客を巻き込んで名曲「Knock on Wood」を歌う(映画「カサブランカ」)

ラグジュアリーライフのあり方も多様であっていい。

世界で2番目に小さい国土に世界の富豪たちが集うモナコ。地中海から岩山を駆け上るように林立するタワーマンションの中でもときわ高くそびえているのが「オデオンタワー」だ。1㎡あたり千万円単位の値がつく高級マンションだが、その足元にはなんと鶏が放し飼いにしている菜園がある。手がけているのはジェシカ・スバラグリア。「すぐ下で収穫した野菜が食べられるというのも、このタワーマンションの売りになっているんですよ」と、鶏小屋で卵を集め、畑の手入れをする彼女に初めて会った人は、その美しい姿に驚くに違いない。それもそのはず、ヨットのデザイン会社を営み、モデルの経験もあるという華やかなキャリアの持ち主なのだ。そんな彼女があるとき自分の生き方を問

い直し、たどり着いた答えが農業。自宅のバルコニーで種を蒔くことから始め、パーマカルチャーの専門家のもとで2年間学んだあと、「テール・ドウ・モナコ」を立ち上げた。百年以上農業従事者がいなかったというモナコで本格的な菜園を始めるのは無謀ともいえる挑戦だったが、信念を持って人々を説得し、アルベル2世大公財団の敷地に最初の菜園を実現した。その後は高級ホテルなどにも拡大し、作物がミシュランの星付きシェフらに求められるまでに成長した。「オデオンタワー」の菜園は総面積450㎡、急勾配の狭い土地に段々畑状に作られているので、機械を入れることはできず、毎日125段の階段を登り降りしての作業。決して楽ではないが、自分が信じる価値観を日々実践するジェシ

カさんの表情は生き生きとしている。「何かを変えるのにあなたがとても小さい存在だと感じる時、蚊と一緒に眠ってみなさい」。ダライ・ラマだったと思うのですが、私はこの言葉に勇気をもたらしました」
一人の女性の信念が、ラグジュアリーライフのあり方を少しずつ変えつつある。

テール・ドウ・モナコ

2016年のアルベル2世大公財団の菜園を皮切りに、高級ホテル「モンテカルロベイ」などでも実践されているモナコの都市農業。「オデオンタワー」の菜園の収穫は、登録しているマンションの住人たちが享受する仕組み。グレース記念病院の菜園では、患者たちが植物と接することでセラピー効果にもなっているほか、これまでとは無縁だったモナコの子供たちに野菜や自然の豊かさを伝える取り組みなどを通じて作物以外の豊かな実りをもたらしている。



都会っ子たちにとって緑とのふれあいは貴重な体験。

MONACO

Gifts from the Earth

ジェシカ・スバラグリアの“信念の実り”

大公とグレース・ケリーの世紀のロマンス、最高級ヨットが浮かぶ紺碧の海。そんなラグジュアリーの名詞のような国モナコで一人の女性の手によって百年ぶりの農業が復活した。

text: Harue Suzuki
edit: Mari Matsubara
photo courtesy of Terre de Monaco



多様性に重きをおいた菜園の実りはトマトだけでも30種。レストランから出る年間5トンの残飯が鶏の餌になっているほか、植物の受粉に有効な蜜蜂など独自のエコシステムが築かれている。

PROFILE
ジェシカ・スバラグリア スイス生まれ。上級商業学校卒業。パリでモデル業の後モナコに移りデザイン会社を設立。2016年に「テール・ドウ・モナコ」を立ち上げる。

STARS

STARS展：現代美術のスターたち — 日本から世界へ
SIX CONTEMPORARY ARTISTS FROM JAPAN TO THE WORLD

YAYOI KUSAMA
LEE UFAN
TATSUO MIYAJIMA
草間彌生
李禹煥
宮島達男
村上隆
奈良美智
杉本博司
TAKASHI MURAKAMI
YOSHITO MORI
HIROSHI SUGIMOTO

2020.7.31[金] - 2021.1.3[日] 森美術館
JUL. 31[FRI], 2020 - JAN. 3[SUN], 2021 MORI ART MUSEUM

主催：森美術館 Organizer: Mori Art Museum

MORI ART MUSEUM

[roppongi hills]

beyond
2020



未来の歓びのために。

歓びに満ちた未来のために、今できること。

それは、安心して人が移動し続けられる、
持続可能な社会を創り出すことだと、私たちは考えます。

輸入車においてクリーンエネルギー自動車
登録台数No.1*のBMWは、
クリーンエネルギー自動車をもっと身近な存在にするため、
特別仕様車「Edition Joy+」を新たに設定しました。

いつだって、会いたい人に逢いに行ける。
どこだって、行きたい場所へ走って行ける。
そんな、当たり前なのが自由にできる毎日を目指して。

BMWは、未来の「駆けぬける歓び」に向け、
これからも走り続けます。

BMW EDITION JOY+

クリーンエネルギー自動車は
新たなステージへ。

EDITION JOY+
FOR MORE INFORMATION



3



X1



i3



New BMW 330e M Sport Edition Joy+ 6,170,000円

New BMW X1 xDrive18d Edition Joy+ 4,710,000円

New BMW i3 Edition Joy+ 4,990,000円

JOY+ Value **-50万円**^{*2} 免税・減税・補助金額合計 **40万8,500円**^{*3}

JOY+ Value **-18万円**^{*4} 免税・減税額合計 **19万1,900円**^{*5}

JOY+ Value **-55万円**^{*6} 免税・減税・補助金額合計 **49万7,900円**^{*7}

充実のアフターサポートを、納得のコストで。JOY of OWNERSHIP

BMWでは購入後3年間の無償メンテナンスをはじめ、高品質かつ多彩なサービスを全モデルに標準付帯。

*1: 輸入車における2011年12月～2020年5月のクリーンエネルギー自動車(電気自動車/プラグインハイブリッド自動車/燃料電池自動車/クリーンディーゼル自動車)の国内累計登録台数のうち、BMW対象モデルの合計台数、日本自動車輸入組合のデータをもとに自社集計。*2: 2020年5月1日までのニュー330e M Sport メーカー希望小売価格(消費税込、6,670,000円)との比較。*3: エコカー減税(自動車重量税減税額)30,000円、グリーン化特例(自動車税減税額)27,000円、環境性能制(非課税額)151,500円、CEV補助金200,000円の合計額。*4: 2020年5月1日までのX1 xDrive18dメーカー希望小売価格(消費税込、4,890,000円)との比較。*5: エコカー減税(自動車重量税減税額)49,200円、グリーン化特例(自動車税減税額)27,000円、環境性能制(非課税額)115,700円の合計額。*6: 2020年5月1日までのi3メーカー希望小売価格(消費税込、5,540,000円)との比較。*7: エコカー減税(自動車重量税減税額)36,900円、グリーン化特例(自動車税減税額)18,500円、環境性能制(非課税額)122,500円、CEV補助金320,000円の合計額。※表示の価格は、メーカー希望小売価格(消費税込)で参考価格です。販売価格は、BMW正規ディーラーが独自に定めておりますので、お問い合わせください。※価格には、税金(消費税を除く)、保険料、登録に伴う諸費用、付属品価格等は含まれません。※リサイクル料金が別途必要となります。※価格は予告なく変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。※掲載した写真の車は一部日本仕様と異なります。また、オプション装備等を含む場合があります。※使用している写真は印刷物のため、実際の色合いと異なる場合があります。※プロダクトに関する詳細はwww.bmw.co.jpおよびwww.bmw-ijp、またはBMW正規ディーラーにてご確認ください。※以上の内容は、予告なく変更、終了する場合がございます。※記載の内容は2020年6月16日現在のものです。【お問い合わせ】BMWカスタマー・インタラクション・センター 0120-269-437 平日9:00am～7:00pm、土日祝9:00am～6:00pm 年中無休。